

県営園場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

青木, 馬場第1・第2
遺 跡

1984

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

県営園場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(1982・1983年度分)

青木，馬場第1・第2 遺 跡

1984

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

序 文

去る1981年(昭和56年)、県営圃場整備事業に伴い、周知の遺跡である、浅羽町梅山地内の青木、馬場第1、西立遺跡の3か所を第1次、第2次と2回に分けて発掘調査を行った。その成果は先に「県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(昭和56年度分)」にまとめ、浅羽町の正しい歴史を知り得る貴重な資料として発刊した次第である。

更に未調査の青木、馬場第1、第2遺跡の畑寄せ部分6か所、約1000㎡の全面発掘調査を1982、83年の2か年にわたって、第3次、第4次調査として継続調査を進めてきた。その結果、昭和58年末をもって計画どおり調査完了し、ここに調査報告書が刊行できる運びになり喜びにたえない。

2か年の調査によって、発掘全域から柱穴群、溝、井戸などの遺構が発見され、内部からは鎌倉時代後期から室町時代初期に属する陶器、木器、貝類、馬骨、ひょうたん等多数の遺物も出土した。所によっては古墳時代前期の遺構、遺物も発見され、第1、2次の調査結果とあわせ、浅羽町の夜明けの時代をより明確に知り得る多くの貴重な資料を得ることができた。

このたびの発掘調査について、当初より引続いて当町在住の柴田稔調査員が担当され補助員に地元の岡本芳見氏をはじめ多くの地元民の協力によって進められた。出土々器の補修には岡本春子さんの熱意によって多くの土器が昔の姿によみがえり、町民の貴重な文化財として保存できることは大変ありがたい。

ここに発掘調査報告書を刊行するにあたり関係者各位に対し深く感謝と敬意を表わす次第である。

昭和59年3月

磐田郡浅羽町教育委員会

教育長 鈴木 豊

例 言

- 1、本書は、県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2、調査は、1892年度分（馬場第1・第2遺跡、青木遺跡A21地点）、1983年度分（青木遺跡A25・A29・A30地点）に分けて行った。
- 3、本書には、先の遺跡・地点が報告されているが、1982年度分として別に行った馬場第2遺跡のF11地点も含めてある。
- 4、調査費は、静岡県中遠農林事務所（現名称）が負担した。
- 5、発掘調査は、静岡県教育委員会文化課の指導の下で行ったが、調査体制は下記のようなものである。

調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会教育長 鈴木 豊

調査担当者 柴田 稔

調査補助員 岡本芳見、久野正博、甲斐博幸、大平秀樹、茂木 誠、中矢 立
山上英誉

事務局 浅羽町教育委員会

事務局長 博松正毅（1983年度）、派遣社会教育指導主事 中村善三郎（1982年度）、社会教育係長 松川幸雄（1982年度）、担当主事 近藤秀男（1982、1983年度）

- 6、資料の整理、および執筆は柴田が行ったが、遺物の実測には、久野、大平、茂木、中矢、山上、甲斐の協力を得た。土器の復元は、岡本春子によるところが多い。写真撮影は柴田が行ったが、現像・焼付は、マツモトカメラ店で行った。
- 7、調査に当っては、内外諸機関および諸氏の援助を受けた。記して感謝の意を表す。

静岡県中遠農林事務所（所長 佐治真一郎、課長 小笠原勝彦） 静岡県磐田土地改良事務所（所長 野末和彦、課長 長谷川沼平） 浅羽町土地改良課（課長 宮地 実）、梅山自治会、松原自治会、新堀自治会、岡本慎一、原田長一郎、伊原一義、川村義男、杉本正信、原田菊枝、原 すが、武田百代、岡本きた、岡本春子（敬称略順不同）

- 8、本書の作成には、先学諸氏の援助を受けた。記して謝意を表したい。

平野和男、山村 宏、向坂鋼二、鈴木敏弘、中嶋郁夫、山崎克己、篠原修二、野沢豊秀、栗原雅也、鈴木敏則、大橋保夫、吉岡伸夫、柴田静夫、伊藤勝治、金原長平、岡本慎一、大庭正八、市原寿文、小林重義（敬称略順不同）

凡 例

- 1、地点の設定 梅山地区の水田地帯は、1950年代前半に土地改良工事が行われた。いわゆる一段歩割の水田造成を行ったわけであるが、この工事の基本線となったのが鑿田用水東部幹線から分流する支線である。この支線を軸として、東西30間、南北10間の水田を南北に6〜7割、東西に2割を一括して農道に囲んである。また、各水田の排水路は、その中央を南北に直進させてある。今回の圃場整備事業は、原則としてこの区画が生かされており、鑿田用水の支線は、そのまま大型農道になる。

したがって、地点の設定は、区画された水田を基準に行った。

1981年度の工区東端ラインにそった区画をAラインとし、西にB〜Fと順次設定し、支線を21ラインとし、北に進むにしたがって数字が増えるようにした。しかし、青木遺跡のA26地点以北では、新堀地区の条里のくいちがいが生ずる。したがって、この地点以北は、単に直線的に地点を延長するのをやめて、水田の区画にあわせることにした。したがって、今回の圃場整備完了後では、大型農道を基線として、原則としては三地点が一区画となる。

- 2、本文中に用いる略号 本文中では、文章の簡便化を避ける意味も含めて略称・略号を用いている。

遺跡・遺構については、表に示したような略号を用いた。また、遺構番号は、小穴群は地点別としたが、他の遺構は遺跡別の連番とした。たとえば、青木遺跡の3号土坑状遺構は、AK3となる。また、これらを図中に記入する場合は、ピットについてはPを省略し小型の数字で示し他は略号通りに記入した。

これらの遺構の略号は、調査時のものと異っている。したがって、遺物への注記号との対照が必要である。この対照表は、次頁に示した。

- 3、略称・用語について いわゆるS字状口縁浅形土器などは、一般的に

はS字壺と呼ばれることが多い。したがって、これらの一般的に用いられている略称は、本文中でもそのまま使用した。また、弥生時代後期などの表現は、他と混同する恐れがない場合には、弥生後期あるいは単に後期と記している。

遺跡の略記号

遺 跡	記 号
青 木	A
馬場第1	B f
馬場第2	B s

土器の器形・成形・調整などの用語は、一般に使用されていると思われるものを用いた。器形を表現する用語には、内湾・内向・外湾・外向など混同し易い語を用いている。内湾・外湾は、線分に対して内向きに湾曲するか外向きに湾曲するかを示し、内向・外向は、中心線に対して内向き、外向きを示している。

遺構の略記号

遺 構	記号	遺 構	記号
ピット	P	焼 土	H
土 坑	K	掘 立 柱	B
溝	D	建 物	T
井 戸	E	住 居	T
貝 塚	S	そ の 他	X

- 4、その他 水準は、圃場整備事業に用いているものと同じ

原点から得ている。挿図の断面図水平ラインを示す線下に記した数字は、これから得た海拔高をセンチメートル単位で示している。また、同一挿図中では、特にことわりがなければ、すべて同一の水準である。

遺物図版の番号は、取り上げ番号を優先し、遺物出土状態の番号と原則的には一致している。

各遺構名新旧対照表

旧 名 称		新 名 称	
地点	区	遺構	略記号
A21	1	1 D	A K 1
"	"	2 D	A K 2
"	"	1 K	A D 1
A25	1	1 D	A K 3
"	2	1 D	A K 4
"	"	2 D	A K 5
"	3	1 D	A K 6
"	"	2 D	A K 7
"	2	1 X	A X 1
"	1	1 T	A T 1
"	4	1 T	A T 2
"	"	2 T	A T 3
"	"	3 T	A H 2
"	2	1 K	A D 2
"	"	2 K	A D 3
"	"	3 K	A D 5
"	"	4 K	A D 4
F11	/	1 K	B s D 4
"	/	2 K	B s D 5
"	/	3 K	B s D 6

旧 名 称		新 名 称	
地点	区	遺構	略記号
A29	1	1 D	A K 8
"	"	2 D	A K 9
"	"	1 X	A T 4
"	3	1 T	A T 5
"	2	1 T	A T 6
"	3	1 K	A D 6
"	2	1 K	A D 7
A30	2	1 D	A K 10
"	3	1 D	A K 11
"	"	1 T	A T 7
D13	/	1 D	B f K 1
"	/	2 D	B f K 2
"	/	1 K	B f D 1
"	/	2 K	B f D 2
F.8	/	1 I	B s E 1
"	/	2 I	B s E 2
"	/	3 I	B s E 3
"	/	1 K	B s D 1
"	/	2 K	B s D 2
"	/	3 K	B s D 3

本文目次

第 1 章	遺跡の立地と環境	1
第 2 章	調査の経過と方法	8
第 3 章	青木遺跡の概要	9
	第 1 節 A21地点	9
	第 2 節 A25地点	12
	第 3 節 A29地点	23
	第 4 節 A30地点	29
	第 5 節 青木遺跡出土遺物の概要	32
第 4 章	馬場第1・第2遺跡の概要	57
	第 1 節 D13地点	57
	第 2 節 E8地点	62
	第 3 節 F11地点	66
第 5 章	ま と め	70
	青木遺跡の古式土師器について	70
お わ り		79

挿入図版目次

第 1 図	周辺の遺跡分布図	2
第 2 図	梅山分区内遺跡分布図	4
第 3 図	江戸時代前期の浅羽平野	5
第 4 図	青木遺跡全体図	10
第 5 図	A21地点全体図	11
第 6 図	A25地点全体図	13
第 7 図	AK4実測図	14
第 8 図	AK6実測図	15
第 9 図	E10ライン土層図	16
第 10 図	AK7実測図	17
第 11 図	AX1実測図	18
第 12 図	AD2・3・5, AK5実測図	19
第 13 図	AD4実測図	20
第 14 図	AT1実測図	21
第 15 図	AT2・3実測図	22
第 16 図	A29地点全体図	24
第 17 図	AK8・9実測図	25
第 18 図	AT4実測図	26
第 19 図	AT5・6実測図	27
第 20 図	A30地点全体図	29
第 21 図	AK10実測図	30
第 22 図	AK11・AT7実測図	31
第 23 図	青木遺跡出土遺物	48
第 24 図	同 上	49
第 25 図	同 上	50
第 26 図	同 上	51
第 27 図	同 上	52
第 28 図	同 上	53
第 29 図	同 上	54
第 30 図	同 上	55
第 31 図	同 上	56

第 32 図	青木遺跡出土遺物 (拓本)	56
第 33 図	D13地点4層出土土器	57
第 34 図	D13地点全体図 (A6 1)	58
第 35 図	同 上 (A6 2)	59
第 36 図	F 8 地点全体図	64
第 37 図	F11地点全体図	67
第 38 図	馬場第1・第2遺跡出土遺物	69
付 図 1	A K 3 出土遺物	73

表 目 次

表 1	周辺の遺跡地名表	3
表 2	浅羽町の町村沿革	6
表 3	第9図および第8図C-D土層図層序	16
表 4	各ピットの深さ	32
表 5	器種別数量 (A K 6 中・下層)	33
表 6	同 上 (A K 6 上層)	33
表 7	同 上 (A K 8)	33
表 8	同 上 (A K 3)	33
表 9	青木遺跡出土遺物観察表	34~47
表 10	第34図D-E土層図層序	60
表 11	各ピットの深さ	61
表 12	各ピットの深さ	62
表 13	第36図E-W, S-W断面図層序	63
表 14	各ピットの深さ	66
表 15	第37図G-H断面図層序	66
表 16	青木遺跡出土のS字装分類の基準	72
表 17	A K 3 出土S字装の分類	73
表 18	青木遺跡占式土師器の各段階	74

写真図版目次

図版 1	青木遺跡 A21地点	上 A21地点完掘状況 下 AK1・2完掘状況
図版 2	同 上	上 AD1完掘状況 下 AD1埋積状況
図版 3	青木遺跡 A25地点	上 A25地点完掘状況 下 A25地点西壁断面
図版 4	同 上	上 AK6発見状況 下 AK6遺物出土状況
図版 5	同 上	上 同 上 (部分) 下 同 上
図版 6	同 上	上 AK6完掘状況 下 AK7遺物出土状況と埋積状況
図版 7	同 上	上 AK4遺物出土状況 下 AX1遺物出土状況
図版 8	同 上	上 AT1遺物出土状況 下 AT2調査状況
図版 9	青木遺跡 A29地点	上 A29地点完掘状況 下 AK8調査状況
図版 10	同 上	上 AK8遺物出土状況 下 AK9完掘状況
図版 11	同 上	上 AT4調査状況 下 AK10遺物出土状況
図版 12	青木遺跡 A30地点	上 A30地点完掘状況 下 AK10遺物出土状況
図版 13	同 上	上 AK11埋積状況 下 AT7完掘状況
図版 14	馬場第1遺跡 D13地点	上 D13地点調査前全景 下 BfK1遺物出土状況
図版 15	馬場第2遺跡 E8地点	上 E8地点調査前全景 下 E8地点完掘状況
図版 16	同 上	上 E8地点井戸状遺構 下 BsE1調査状況

- 図版 17 馬場第2遺跡E8地点 上 B s E 1底面遺物出土状況
下 B s E 2埋積状況
- 図版 18 同 上 上 B s E 2底面遺物出土状況
下 B s E 3底面遺物出土状況
- 図版 19 同 上 上 B s D 1・D 2完掘状況
下 E 8地点北西端貝塚
- 図版 20 馬場第2遺跡F11地点 上 F11地点完掘状況
下 P 5発見状況
- 図版 21 青木遺跡出土遺物 (A X 1)
- 図版 22 同 上 (A X 1・A K 6)
- 図版 23 同 上 (A K 6)
- 図版 24 同 上 (A K 6)
- 図版 25 同 上 (A K 6・A T 1・A K 7等)
- 図版 26 同 上 (A K 4・A K 8等)
- 図版 27 同 上 (A K 9・A K 10・A T 3等)
- 図版 28 馬場第1遺跡出土遺物
- 図版 29 馬場第1・第2遺跡出土遺物
- 図版 30 馬場第2遺跡出土遺物

第1章 遺跡の立地と環境

県営開場整備事業梅山分工区内にあって調査の対象となった遺跡は、青木、馬場第1、馬場第2および西立遺跡である。また、工事対象から除外された遺跡には、黒清、屋敷道、北狭間などがある。これらの遺跡は、第1図にみられるように、豊住から新堀へと続く微高地と、浅名から奥道浅名間笠線にそって続く微高地に立地している。

この微高地が古い時期の原野谷川によって形成された自然堤防である可能性は、袋井市域から連続的にたどれることから充分理解できる。

これらの自然堤防上には、諸井から浅名にかけての柴田静夫氏が発見した十二所、高道、奥畑、小林、若宮、上川地などの遺跡が知られている他、豊住地内にも数か所遺物が採集できる地点がある。いいかえれば、水田面に接した微高地上のほとんどが遺跡といえる。これらの内、新堀地区北端の北狭間遺跡以南の自然堤防上の遺跡と、松山、宮前、宮西などの砂堤列上の遺跡を梅山遺跡群と総称している。また、以北の遺跡は浅羽遺跡群と呼ぶことにするが、広義には浅羽平野遺跡群として理解できよう。

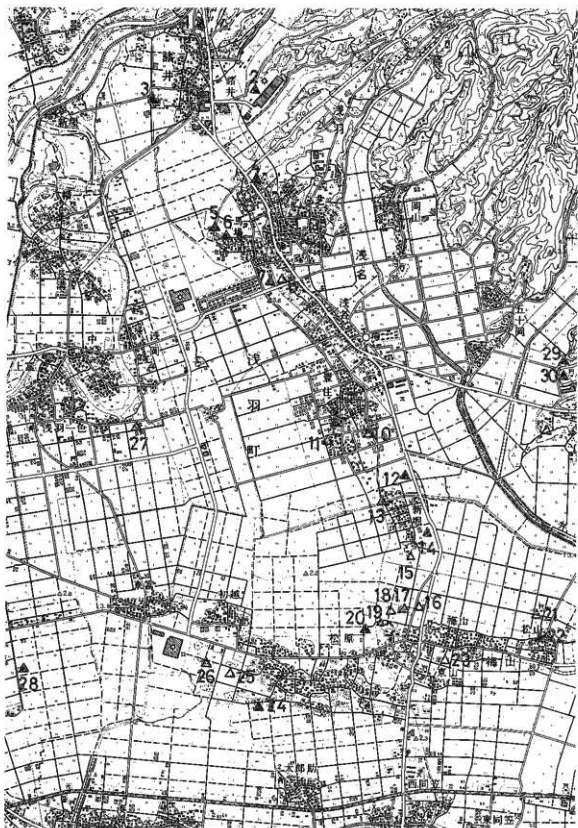
第2図に示したように、豊住地区から続く自然堤防と、浅名地区から続く自然堤防との間には、幅50m程の南北に長い低地帯が存在しているが、第3図の、平民村、石原村、新堀村は自然堤防を横断するように幅数十メートルの低地帯によって村域をつくっている。

この低地帯も古い河川の流路であったことは充分に考えられることであるが、このような形での村域の形成は、馬場第1、第2、西立、宮西の各遺跡間に存在する低地帯においても検討しなくてはならないものである。村を別にしていたという考え方でなくても、異った単位集団の存在は考えられよう。距離的に近接している先の遺跡それぞれを別個の遺跡としてあつかっているのはこのような観点に立っているためである。

さて、第3図に示したように、これらの自然堤防と梅山から大須賀町石津方面へと続く砂堤列および小笠山塊南麓との間は、江戸時代前期にあっても広大な湿地帯を形成していた。この状況は、古新田、新新田などの地名にあるように、除々に水田化していったとはいえ、安政大地震による海岸線の隆起があるまでは継続していた。また、その名残りは、近年においても大降水時に知ることができる。

この湿地帯が、それ以前には縄文時代前期ごろを頂点とした海水準の上昇とそれにつづく低下に伴って形成されたラグーンの一部であったことはいうまでもないことである。

縄文海進の時期には、梅山、松原などは海面下で形成されていた砂洲であったわけであるが、新堀地区や青木遺跡などは沖積粘土を基層とし、馬場第1遺跡は原野谷川系の砂礫層を基層として形成されている。これが微高地となるのは縄文時代である。おそらく、ラグーンに流入した原野谷川は、急激に流速を失うことになり、それにとまなう堆積作用によって微高地化し



第1図 周辺の遺跡分布図

た三角州状の地形と考えられよう。馬場第1遺跡において発見された厚さ数メートルの礫層は、その地点が旧河川の開口部真正面にあることから、野谷川が運搬した砂礫であることに何ら問題はないであろう。

原野谷川の流路は、やがて柳原付近から西方向を流れ、浅岡、長溝、釜屋から福田町豊浜方面

表1 周辺の遺跡地名表（古墳は省略）

番号	遺跡名	時期	種類	立地	備考
1	王子	弥生	墳墓	尾根	横田式
2	十二所	弥生～	散布地	自然堤	
3	貫名地	弥生～	集落	尾根	竪穴住居
4	高道	弥生～	散布地	自然堤	
5	奥畑	古墳前～	〃	〃	
6	小林	弥生～	〃	〃	
7	若宮	弥生～	〃	〃	
8	上川地	鎌倉～	〃	〃	
9	常楽寺	弥生～	〃	〃	
10	平民	古墳前～	〃	〃	
11	石原	古墳後～	〃	〃	
12	北狭間	弥生～	〃	〃	
13	屋敷通	平安～	〃	〃	墨書
14	青木	古墳前～	集落	〃	本紙掲載
15	黒清	奈良～	散布地	〃	
16	西立	鎌倉～	集落	〃	一次報告
17	馬場第1	古墳後～	〃	〃	本紙掲載
18	馬場第2	奈良～	〃	〃	〃
19	八幡宮	古墳後～	散布地	砂堤	
20	宮西	古墳前～	〃	〃	三次報告
21	宮前	平安～	〃	自然堤	
22	松山	弥生～	〃	砂堤	
23	野島	鎌倉～	集落	〃	一次報告
24	橋現山	弥生後～	散布地	〃	
25	地蔵山	鎌倉～	〃	〃	
26	宮ノ腰	鎌倉～	〃	〃	
27	釜下	古墳後～	〃	自然堤	
28	塩口	古墳前～	〃	〃	福田町

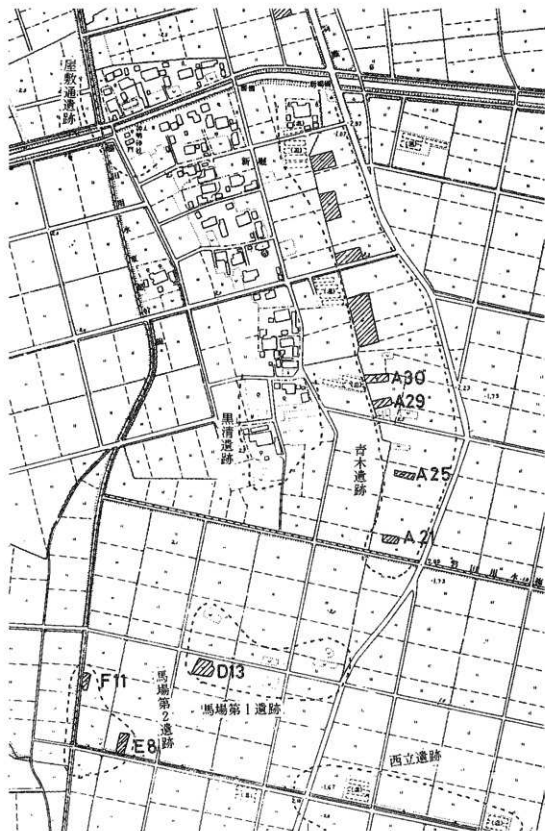
面によって行ったようであるが、その結果諸井、芝、豊住、新堀、梅山、松原などに弥生時代中期から古墳時代前期ごろを初源とする農耕集落がいとままれたのであろう。

以上のような地理的環境は、浅羽平野の成立に関して、静岡県史などの指摘を否定するものであると同時に、同書における和名類聚抄の地名考、あるいは、延喜式内社その他奈良から平安時代の施設の存在推定地などを考えなおさなくてはならない事実であろう。

また、これと関連して西隣りの福田町の歴史も再検討しなくてはならない。

福田町塩口遺跡は、浅羽町東葛と福田町豊浜との中間の水田地帯の遺跡であり、粘土層を基層としている、この遺跡も、おそらく古い時期の原野谷川流路との関連でその立地を考えなくてはならないが、少なくとも5世紀にはすでに生活が営まれていたと考えなくてはならないであろう。

福田町内の旧福島村には葛遺跡、一色地区には一色知泉庵遺跡があり、前者は7世紀、後者は6世紀の遺物を出土している。この両遺跡は、砂堤上の遺跡であるが、浅羽町内の砂堤との関連でみると、同笠、大郎筋、湊などに



第2図 梅山分区内遺跡分布図

浅羽平野に形成されたこれらの農耕集落が、旧原野谷川の残した湿地帯、埋積の進行によって形成された旧ラグーンの湿地、砂堤列間低地（後背湿地）を耕地としていたことは、自然環境が鮮明に表している。たとえば、貞享3年の絵図にみられるように、弥生時代の集落が、浅羽井組（1745年文書）から諸井用水へと発展してゆく用水組合を構成した地域内でしか発見できないのも事実である。用水組合が、大井東用水、大井西用水、仲井用水、山名用水など、袋井市内の太田川流域に成立したのが近世の初期ごろとされているが、これらが、旧太田川流路とのつながりで形成された地縁の関係にあることは見逃すことはできない。

浅羽井組は、原野谷川にその水源を求めようという前提に立つと、貞享3年にはまだ、成立していないことになる。この時期の用水は、近代に至っても「宝水」（小笠沢川水系の用水で、宝野からの水という意味らしい）として時折使用されていた水路を用い、八坂池あるいは笠西池へ滲水した小笠沢川、法多沢川あるいは小笠山塊の伏流水を用いていたようである。

しかし、少なくとも貞享3年にそのような用水が存在することから、その初源はさらに古く、太田、原野谷分流工事以前に求めることができる。

表2、浅羽町の町村沿革

旧村名	明治初年	明治22年	元禄期石高	明治期石高
上路井村	諸井村 (9年)	428	383石	※391石
下諸井村				※432
馬場村	浅羽村 (9年)	225	186	186
末長村			154	153
弥太井村			225	225
芝村			694	※741
篠ヶ谷村			150	150
上浅羽村				
岡山村	浅名村 (9年)	73	85	85
松下村			244	244
善能寺村			73	73
小口市場村			155	155
持広村			93	93
石原村	豊住村 (8年)	752	61	61
平民村				※762
初越村	東浅羽村	697	399	399
松原村			1,230	※1,312
梅田村				
東山村			230	230
松山村			197	※221
新堀村		259	※267	

旧村名	明治初年	明治22年	元禄期石高	明治期石高
八幡村	浅岡村 (9年)	377	109石	109石
米丸村				※378
一色村	西浅羽村	457	232	232
中村				※463
長溝村	富里村 (9年)	426	423	423
戸羽野村			984	※1,006
西ヶ崎村				※449
湊村	幸浦村	142	1,079	※1,083
太郎助村			312	※348
西岡笠村				※264
東岡笠村	寄木村 (9年)	271	447	※490
同笠新田			214	※683
中新田				※455

注。東岡笠・同笠新田・中新田は城東郡内。新田で元禄期に石高のあるものは、先の2新田の他赤太井新田がある。

明治期石高には、梅田村地先、中村流新田などの新田を含む。※印は、石高増加を示す。

注。元禄大保明治送州国石高表、「遠江国町村沿革表」（磐田市誌編纂室発行）を整理し表にしたものである。

これらの問題は、本報告書においては多くを記していないが、弥生時代に成立した農耕集落が、連続的に鎌倉・室町時代へと発展し、急速に消滅してゆく事実と照合した場合、近代に至るまで続いた用水組合の初源は、浅羽平野に成立した遺跡群が弥生時代以来の居住地を廃し集村化という両期をむかえたところといえよう。

弥生時代の農耕集落が、実は浅羽平野の稲作地帯を形成してゆく母体として歴史的にたどり着くことを立証する1つとして、浅羽井組・諸井用水をとりあげたが、ここには、水利権という強い力の存在が作用したことも併せ理解する必要があるだろう。

諸井用水組合における諸井村は、最高権力を持つ担当人を選任する権利を持ち市場村には、「浅名の箸箱」と呼ばれた以極があり、下流への水量を調整し、それぞれにその力を発揮していたのである。

これらの水利権の成立は意外に古いのではないかと考えられるが、今その上限を知ることはできない。今後、浅羽平野の遺跡群の調査が進むにつれて明らかにすることが可能であろう。

第2章 調査の経過と方法

1981年6月から7月の第1次調査および同年7月から8月の第2次調査において、梅山分工区内の遺跡の分布はある程度把握された。特に、水田内に点在していた、A21、A25、A29、A30、D13、E8、F11地点の畑は、すべて遺跡であることが判明した。これらの畑は、水田作業の能率化のために一か所に集中させる計画であった。

この畑寄せの工事は、1981年度工事内に含まれていたが、遺跡保存のため工事の計画変更も含めて再検討された。しかし、結果的にはすべて削平し水田とすることに決定された。

当調査は、このために実施されたものである。

現実には、少しでも遺跡の破壊を少なくするために、もっとも広い面積を持つD13地点の畑を中心に畑地化する案や、比較的遺構の密度が高いA29～30地点付近に寄せる案なども検討されたが、水田の用排水の問題や、換地の問題などが解決できなかったために、文化財保護の立場からは、調査後破壊という最低線での妥協となった。しかし、地元自治会をはじめとした工事関係者の保存への努力は充分に評価されるべきものであろう。

当調査は、1981年度工事予定地内ではあったが、先のような事情と、1982年度の工事予定地内に宮西遺跡およびF11地点があったために、1982年度は、この両者と、E8、D13、A21、A25を調査の対象とし、A29、A30地点は、1983年度分調査となった。

当報告書では、これらの内、青木・馬場第1、第2遺跡をあつかっているが、F11地点は、松原分工区（1982年度工事工区）に含まれ、E8地点はそれとの関連で予算化している。したがって、実際には宮西遺跡と共に報告書とすべきかも知れないが、遺跡の性格上宮西遺跡とは切り離してあつかった。

F11地点は、1982年7、8月に調査を実施したが、他の地点は、1982年12月15日に開始し、最後の地点となったA30地点の完了は1983年11月初日となった。

調査資料の整理は、1983年6月から現地調査とは別に進めた。特に、水田地帯の農繁期となる夏期は、湧水の増加、作業員の出役状況の不安定などの原因で発掘調査が安定した進行をみせないため、室内作業を優先して進めた。

報告書作成作業は、発掘調査完了と同時に開始し、1984年3月に完了した。

第3章 青木遺跡の概要

青木遺跡は、梅山字青木付近を中心とした南北に長い微高地に立地している。その南限は、A21地点付近であり、西限は、新堀との間にある狭小な低地帯であろう。また、東限は、県道西同笠浅羽線にそっていると考えているが、梅山字大屋付近にまで達していることも考えられる。北限に関しては、新堀字狭間から北狭間にかけての微高地も遺跡であり、さらに北方の豊住橋付近の微高地にも遺物の散布がみられる。したがって、東西幅100m、南北長800mの細長い範囲であるが、北狭間遺跡と青木遺跡に分けて考えることもできよう。

1950年代ごろまでは、付近一帯には多くの島畑がみられた。第2図が作成された1963年にもその景観はある程度保たれていたが、調査の時点では、梅山地区内では4か所の島畑が残存していただけである。

これは、元来低地帯を生活の基盤としている梅山地区にあっては、圃場改良、宅地整備などに島畑の粘土が用いられたためである。また、第1次の土地改良事業において、農道の造成に用いられた畑も少なくない。

しかし、第1・2次調査において判明したように、水田耕作土直下には今も遺構・遺物を発見することができ、決して遺跡が消滅しているわけではない。

今回の調査の対象となった地点は、A21、A25、A29、A30の三地点に残された畑地約500平方メートルである。

以下にその概要を記す。

第1節 A21地点（第5図）

梅山字青木1107番地の畑である。現在は、岡本英樹氏に換地されている。

土坑2、溝状遺構1、ピット群が発見された。これらの発見面は、海拔180cm前後で、2層下部から3層上面である。また、2層内には、焼土の分布や古墳時代後期から平安・鎌倉時代ごろの遺物が発見されたが、遺構は検出できなかった。

1、土 坑

AK1

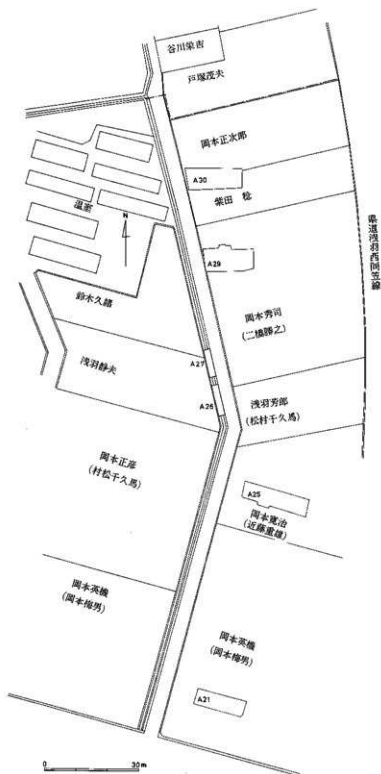
幅約1.7m、長さ約2.6mの丸味をもった長方形プランを呈している。北側から階段状に深くなり、南側の最深部分で約0.5mの深さである。

第1次調査の試掘グリットで北東側を破壊している。

出土遺物は、土師器の小破片だけである。

AK2

長径約1.4m、幅約0.55m、深さ約0.15mの長楕円プランを呈し、断面形は「U」字状である。



第4図 青木遺跡全体図

出土遺物は、土師器の小破片だけである。

2 溝状遺構

AD1

推定長約6m、幅約1.3mの溝状を呈している。内部堆積土が遺構を構成する粘土に類似していたために、若干不正確な調査となった。断面図でみられるように、深さは約0.2mであるが、平面形が確認される前から遺構部分に遺物が集中して発見される傾向をみせており、その所見にもとずくと、深さは約0.4m以上である。

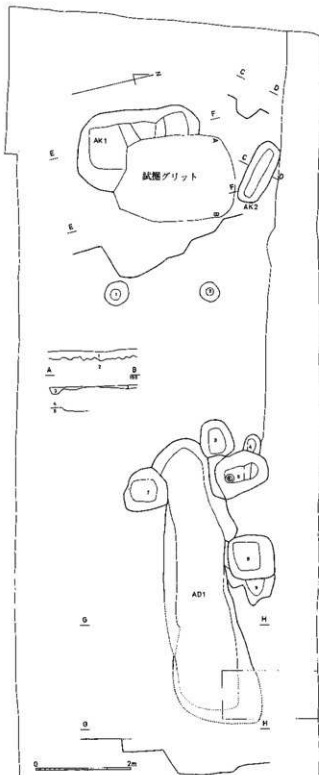
周辺に数個のビットが発見されているが、同一の遺構か否かは不明である。

内部堆積土中には多量の土師器片を含んでいたが、出土状況は雑然としている。また、大型破片はみられたが、完形品あるいはこれに準ずる例はない。すべての遺物が土砂堆積中の混入と考えられる。

3、ビット群

合計9個が発見された。すべて古墳時代前期に属すると考えられる。

P3・4・9は、深さ10cm前後の浅くて不整形なものである。P5・7・8は、平面形が隅丸方形となり、径80～100cm、深さ40～50cmである。P5内には、深さ約10cmの小ビットがある。L字状の配置を示す3者の芯々距離は、約1.8



第5図 A21地点全体図

mありもう1つ発見できれば建物を想定してよいであろうが、発見できなかった。

P1・2は、径40～50cm、深さ約16cmで柱穴と考えられる。

P1・2・5～8は、建物の柱穴と考えたい。

第2節 A25地点（第6図）

梅山宇青木1113番地の畑である。現在は、岡本寛治氏に換地されている。

土坑5、溝状遺構4、住居跡状遺構3、不明遺構2、焼土散布範囲2、ビット群が発見されている。これらの内、焼土散布範囲（H2）、住居跡状遺構（AT2・3）、ビット群は古墳時代後期に属するが、他のものはすべて古墳時代前期に属している。

古墳時代後期の遺構発見面は、海拔180～190cmの高さにあり、現水田面より高い位置である。また、遺構の分布は、調査区東半に限定され、西半では遺物も少ない。

古墳時代前期の遺構発見面は、海拔150cm付近にあり、他の地点に比較すると若干低い。

第6図A B断面の3・4層の境付近が古墳前期の生活面と考えられるが海拔140cm程度であり、西に向って若干の傾斜がみられる。

1、土 坑

A K 3（第13図）

第1次調査の試掘グリットが、遺構の中心部にはっており、このため遺構の状況が不明確である。

AT1、AD4と重複しているが、これらに先行して作られている。

長径約3.3m、短径約2.1m、深さ約0.8mである。内部の堆積土は、有機土が主体であるが、6、9層などは粘土質であり、基本的には交互堆積である。

試掘においては、AT1が確認できず、AT1内の堆積土は、5層とし無遺物と考えていた。しかし、6層以下はAK3の堆積土であることが明確になったことと、5層の遺物が採集できていないことと合わせ考えると、第1次調査のA25グリット内遺物は、すべて当土坑内遺物である。

遺物の出土状態は、条件の悪かった試掘の所見によらずにはならないが、下層として取り上げたもの以外は、9層以下に集中して発見されている。しかし、6、7層など上層と考えなくてはならない層の遺物が混入していることは充分考えられる。

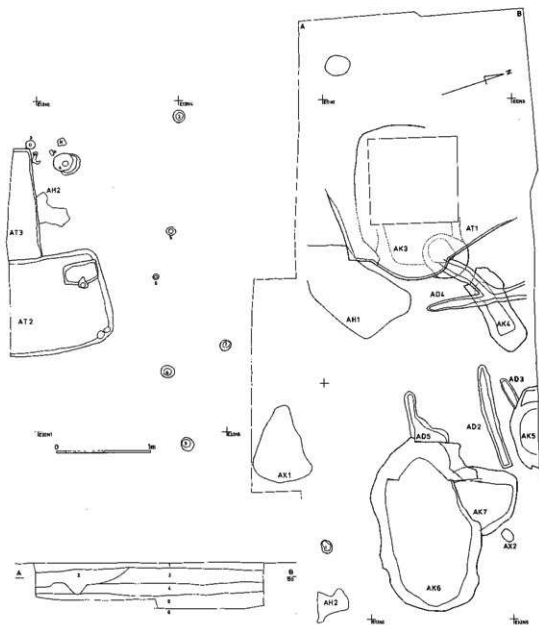
A K 4（第7図）

AD4と重複しているが、これに先行する。AD4発見面ではまったく検出できなかった。

長径約1.9m、短径約0.7m、深さ約0.55mの長楕円形プランを呈し、断面形は「U」字状である。

内部の堆積は、最下層がほぼ水平堆積である以外は自然堆積である。第2層には多量の炭化物が含まれている。

出土遺物は、定形の壺形土器1点を含むが多量とはいえない。No 1～9は2層内、No10は3層内出土である。また、No 7のS字襷は、No 1の口縁部近く（No 3）や北壁に接しているNo 4と同一個体である。



土層図A-B（西壁）層序

1 水田耕作土 2 灰褐色粘土（鎌倉時代以降） 3 淡褐色粘土（土師器、少量の炭・焼土を含む。4層との境には、炭化物の薄層がある） 4 茶褐色粘土（少量の炭化物を含む。上半部には極少量の土師器を含む） 5 茶褐色粘土（砂質が強い。無遺物） 6 褐色砂

第6図 A25地点全体図

AK5 (第12図)

北壁に接して発見された。AD3との関係は不明である。北壁部分で幅1.8m、深さ約0.6mである。AK3、AK6など同一形態の土坑であろう。

AK5 (第8、10図)

AK7と重複しているが、これよりは新しい、AD4との関係は不明である。

長径約3.7m、短径約2.2m、深さ約0.8mで、楕円形プランを呈し、壁面は比較的直立し、底面は平坦である。AK3と比常によく似ている。

内部の堆積状況も、AK3、AK5と類似し、有機物を多く含んでいる。

CD断面の6層以上、E10ラインの18層以上とそれ以下とは、土層に大きな変化がみられる。

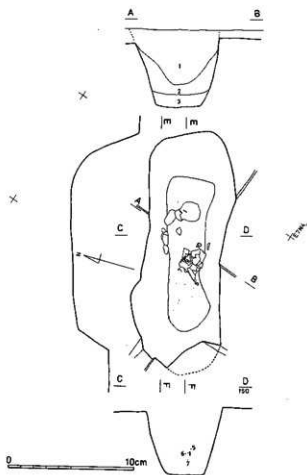
前者は、2層を除いて有機質が強く黒味を帯びた土であるが、後者は、褐色系の色彩を呈し、有機物は、部分的に薄層がみられる程度である。11、13層は、早い時期の壁面の崩れと考えられる。

多量の土器を出土し、完形品あるいはこれに準ずるものも少なくない。

出土遺物は、2、3、4、5、18、19層を上層遺物、6、8、9、20層を中層遺物、10層を下層遺物として取り上げた。しかし、6層は、上層とすべきかも知れない。したがって、中層の遺物とした破片には、後に示すように上層にみられる新しい要素の土器が含まれることも考えられる。

上層には完形あるいはそれに準ずるものはなく、全体に小破片が多い。完形あるいはそれに準ずるものは、8、9層に集中している。特に、8層の中位から9層の上面にかけて出土高の下端をもつものが多い。

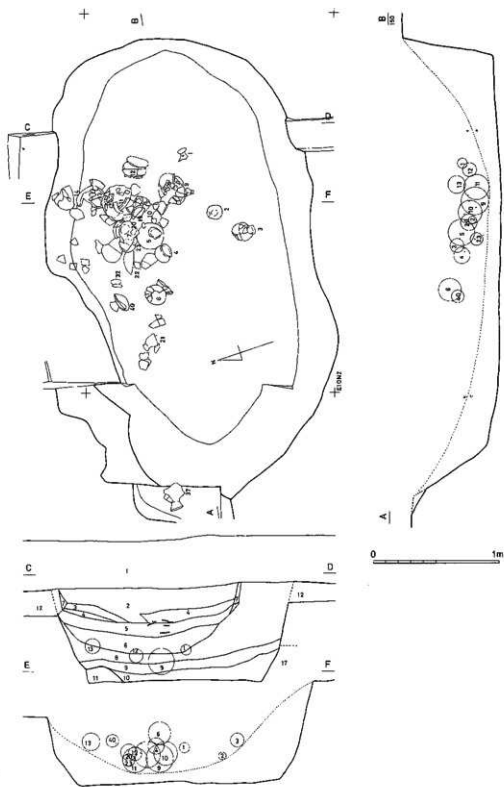
これらの内、No4、5、6、9、10、11、12、20、40などは、完形品が横転した状態あるいは若干移動した状態と考えられるばかりか、投げ入れたというよりは、置かれたと考えた方が妥当な出土状態を示している。これらの土器を手掛りとして、置かれたと考えられる土器とそ



土層図A-B層序

1 黄褐色・灰色粘土と少量の炭化物の混合 2 黄褐色・灰色粘土と多量の炭化物 3 少量の炭化物を含む灰色砂質粘土

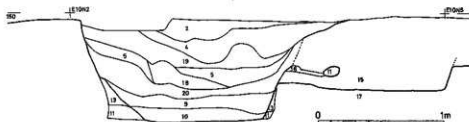
第7図 AK4発掘図



第 8 图 AK6 宾测图

の出土高の先端、下端の差を直径とした円を断面図内に投影したのが、AB、CD、EF断面図の円である。これらの他、No 7、14なども大型の破片あるいは完形品に準じたものであるが、No 14は破片がNo 11付近まで移動し、原位置の復元が困難であり、No 7は、横転しているが、胴部以下が欠失した事情が不明確なため除外した。また、No 2は、脚部が発見できないためNo 7などと同様な考え方もできるが、口縁部が完全に残っていたため、置かれたものと考えた。

これらの出土レベル下端から土器が置かれた時期の土坑底面を予想したのが、AB、EF断面図の破線である。No 4、6などは、いずれの破線からも浮いているが、出土位置が、断面より離れて壁面に近いためである。しかし、No 4は、どのような復元を行っても10cmほど底面より浮いている。図版5上の写真でみるように、No 5にもたれるような出土状況であり、木製の台



第9図 A25地点E10ライン土層図

表3 第9図および第8図C-D土層図の層序

記号	層名	土層の概要	どの浸透した土。
1	褐色粘土	少量の炭化物・焼土などを含む古墳後期以降の層。	8 淡黄褐色粘土 青灰色・茶褐色の粘土、少量の炭化物を含む。一抔土器は、この層に含まれる。中層。
2	淡茶褐色粘土	1に類似しているが有機物が多い。上層。	20 淡黄褐色粘土 8と同層であろうが、土器片が特に多い。中層。
3	暗褐色粘土	有機物を多く含む。上層。	9 黄褐色粘土 鉄分を多く含む。下層。
4	黒褐色有機土	3と類似しているが、有機物と土器片が多い。上層。	10 淡緑青灰色粘土 いずれも無遺物層である。本来は、土坑の床面・壁面を構成していたものの変質と考えられる。
5	暗褐色土	3と類似しているが、多量の土器片を含む。上層。	11 黄褐色砂質粘土
18	黒褐色有機土	5と同層の有機質の強い部分	12 淡黄褐色粘土
19	茶褐色粘土	遠隔西平に堆積し、炭化物の層を含む。上層。	13 黄褐色粘土
6	茶褐色土	部分的に黒褐色有機土の層がある。中層。	17 褐色砂
7	灰色粘土	遠隔見目の壁内面にみられるが、他の部分の観察では、き裂な	15 淡黄褐色粘土 8、20に類似している。AK7の覆土。
			16 暗褐色有機粘土 部分的な層だが、AK6・7の切り合いをみせている。

の上に置かれていた可能性もあろう。

以上のことから、No 1～6、9～13、20、23、40は、一時期に置かれた可能性が高いと考えたい。

これらに対し、No 7、14、21、22、32などは、その後に投棄されたものと考えたい。

これらのいわゆる土坑内一括資料については、もう少し科学的根拠をもって指摘すべきであるが、それは、遺構の類例とその使用目的の検討と含めて考える必要があろう。

AK 7 (第9・10図)

AK 6に切られている土坑である。楕円形プランの土坑と考えられるが規模は不明である。深さは現状で約20cmである。

切り合い関係は、E10ラインの断面における16層がAK 6によって切断されていることから理解できる。しかし、20層と15層は類似した土質である。

当土坑内堆積土は、他の土坑と比較して有機物の混入が少ない。このため、AK 6を調査している初期の段階では同一遺構と考え、遺物の取り上げもAK 6として行っている。第10図の遺物番号上の傍線は、AK 6として取り上げたものを示している。しかし、No15の発見面では、遺物図版で上層出土とした資料があり、実際の掘り込み面はAK 6とはほぼ同じと考えられる。

出土遺物は、No16、17のように遺構発見面より高い位置にあるものと、No11のように底面に近いものとの区別ができる。また、No23の土器底部は、AK 6中層のNo22と同一個体であり、AK 6内に当土坑に伴う遺物が混入している。

2、不明遺構

AX 1 (第11図)

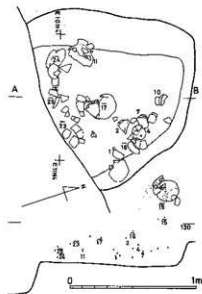
AK 6などの遺構が検出された段階で、調査区の周囲に水切りの小溝を掘ったが、この時に破線で示した礫2個とNo15の甕が発見された。これらを含んでいた土層は、AK 6の調査において12層としたものと同一で、本来的には無遺物層であるが、AK 7の事実が示すように遺構内堆積の場合もあることがわかった。

調査予定地外であるが、遺物出土面が耕作面に近いため拡張して調査した。

拡張区の南端には第6図の2層がみられ、遺構はさらに南に続くとしても検出は不能である。

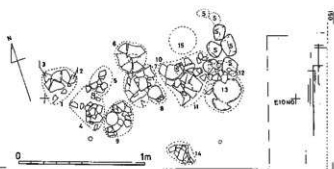
遺構の検出には努力をしたが、結果的には出土遺物から遺構の存在を知ることとなった。

第11図右側の図は、各出土遺物の下端と横への広がりおよび各礫の上端と下端の位置を模式



第10図 AK 7実測図

化したものである。横線は土器、縦線は礫である。これによると、各土器の下端高は、No14が最下であり、No1、12が最上であるがその差は約10cmある。また、礫は、すべて焼けていたが近くには焼土等は発見できなかった。礫の下端は、土器に比較すれば低位置にあると同時に土器の上に乗ることはない。



第11図 AX1実測図

土器の分布状況であるが、No14はNo7内に同一個体がある。No4はNo5、9の一部と同一個体である。また、No9の脚部に接合された破片にはNo4があり、No5、7も一部が接合できた。このことは、No4、5、9とNo5、7およびNo7、14とは相互に関連しておりある種の飛散した状況にあるといえよう。口縁部から底部までが連続する例がないのもこのことを裏付けているのかも知れない。

一方、これらの焼礫、土器の出土高は、この付近の遺物包含層が海拔140～150cm以上であることを考えると、遺構としては確認できなかったが多少の窪地が浅い掘り込みが想定できる。

しかし、土器のあり方、焼礫の状態などからは、他で使用されたものを一括して投棄した場所という理解が可能であろう。

AX2 (第9図)

第9図右下にあるNo15の土器を不明遺構と考えた。当初は、AK6あるいはAK7に伴うのではないかという所見を持っていたが、完全に両者の外側になったことと、完形品であったことからそれらとは別なものと考えた。

掘り込みは検出できなかったが土器棺の可能性が強いと考えたい。

3 溝状遺構

AD2 (第12図)

幅20～30cm、長さ約220cm、深さ約13cmのはほぼ直線的な溝状遺構である。

内部からは少量の土師器が出土している。

AD3 (第12図)

AK5と切り合っているかAK5に関連するものであろうか確認できない。

幅約20cm、現存長約70cm、深さ約10cmである。

AD4 (第13図)

AT1、AK3、AK4と切り合っており、一括資料を出土している各遺構の関連を知ることのできる遺構である。AT1よりは古く、AK3・4よりは新しい。

幅20~30cm、深さ約10cmで、「Y」字状に検出された。両者が同一であるか否かは確認できなかったが、同一と考えた。

AD5 (第12図)

AK6と切り合っているか関連すると考えられる。

幅約20cm、現存長約100cm、深さ約10cmである。

AK6側で北に大きく膨らむが掘り過ぎの可能性が強い。

AK6との関連は、層位的にはつかむことができなかった。しかし、第8図のNo37とした土器は、AK6によって削り取られたとも考えられる。

4 住居跡状遺構

AT1 (第14図)

AK3、AD4と切り合っている。

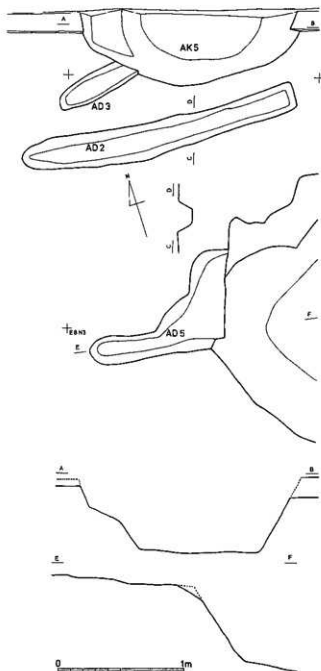
第1次調査で確認できなかったばかりか、今回の調査でもAK3に注目し過ぎたこともあり大半を破壊してしまった。

当初は、AK3の上層を調査しているものと考えていたが、No11以下の土器は、試掘時の第5層に伴う遺物であったことと、北東側の壁面に焼土の地積があり、壁の

立ちあがりや床面が若干認められたため住居跡と考えた。規模は確認できなかった。

AT2 (第15図)

南側は、水田によって破壊されているが、東西約2m、南北現存長2.2m、深さ約0.1mの竪穴住居跡であろう。壁にそって幅10cm前後、深さ3cm前後の壁溝がみられる。また、東北隅に



第12図 AD2・3・5、AK実測図

貯蔵穴と思われる部分がある。支柱穴らしいものは発見できなかったが、住居床面から小ビットが3個発見された。いずれも深さは10cmに満たない。

内部には多量の焼土と炭化物が含まれていたが、北東側の炭化物は敷物とも考えられる。6世紀末から7世紀前半ごろの住居跡であろう。

A T 3 (第15図)

A T 2に切られている。現存長は、東西約2.3m、南北約0.7mである。壁高は数cmで、壁溝は発見されなかった。

P 3は、当住居跡に伴うとも考えられる。

5 ビット群

住居跡内の小ビット以外に9個のビットが発見された。発見面は、いずれも古墳時代後期の面である。

P 7～9などは建物跡を想定したいが、もう一つがどうしても発見できなかった。

6 その他の遺構

A H 1

A K 3の南東側から発見された焼土の分布である。正確には、焼土混りの淡黄褐色粘土がみられる範囲であるが、遺物などはまったく発見できなかった。

発見面高は、海拔約140cmである。

A H 2

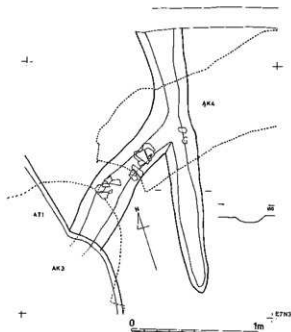
A T 3の北側に分布した焼土である。良く焼けており、住居跡の残欠とも考えられる。発見面は古墳時代後期の面である。

7 各遺構の切り合い関係

当地点の遺構は、多少の切り合いをみせている。その関係は、各項において示したが、古墳時代前期に関しては、土器の編年とも関連するため整理しておく。

A H 1は、遺構の性格がわからないばかりか焼土の分布だけのため本来の形態はつかめないが、分布範囲を迫った限りでは、少くともA T 1に切られている。

A T 1を中心に切り合いを考えた場合には、A D 4との関係に多少問題点があるともいえる。それは、A T 1の調査が、A K 3と混同して行われたためである。しかし、A T 1の壁が第14図の破線で示した部分であることはほぼ確実であるから、A D 4がA T 1の覆土内で発見され



第13図 AD 4 実測図

た事実とはみとめられない。

したがって、AT1に対しては、AH1、AK3、AK4、AD4のすべてが先行している。

AD4に先行するのは、AK3とAK4である。

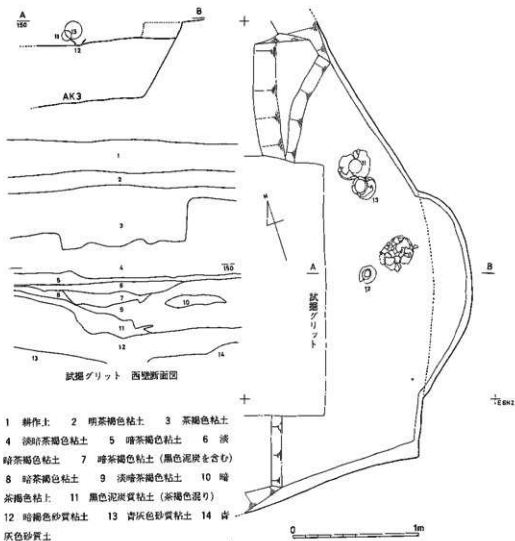
このように考えると、AT1を中心とした新旧関係は、大きく3段階にわけることができ、次のようになる。

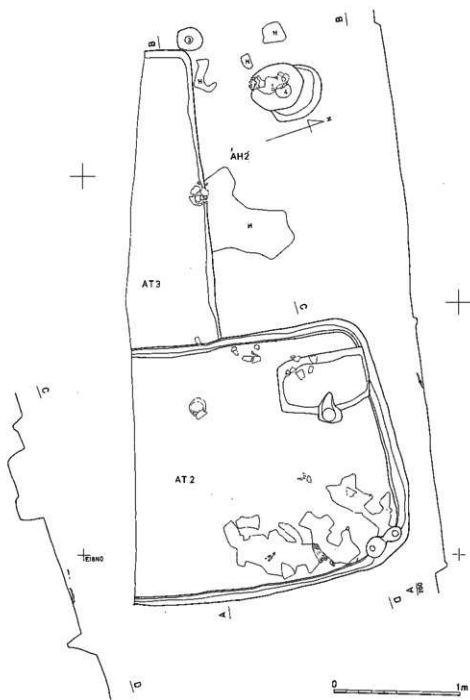
第1段階 AK3・AK4

第2段階 AD4

第3段階 AT1

第3段階より古い AH1





第15図 AT2・3実測図

また、AD5、AK6、AK7の関係においては、

第1段階 AD5・AK7

第2段階 AK6

に大別される。

以上の2～3段階に分けられる遺構は、集落景観の復元にかかわるであろうが、当調査では不可能である。

第3節 A29地点（第16図）

梅山字岩木1126番地の畑である。現在は、岡本秀司氏に換地されている。

土坑2、住居跡状遺構3、溝状遺構2、ピット群が発見された。一部に無遺物に近い遺構もあるが、すべて古墳時代前期の遺構と考えられる。

第16図の発掘区西壁断面図3層は、古墳時代以降の遺物も含む層である。この層内から焼土なども発見されたが遺構の確認はできなかった。

古墳前期の純粋な包含層は発見できなかったが、遺構検出面は海拔180cm前後である。したがってA25地点に比較すれば高い位置である。

1、土坑

AK8（第17図）

長径約3.4m、短径約2.3m、深さ約0.9mで、楕円形プランを呈し、底面は南側から階段状に低下するが、個々には平坦で壁の立ち上がりも比較的急である。

内部の堆積は、AK6と類似している。6層は、遺構を構成している上半の無遺物層と見分けがつかないほど類似しているが、若干の遺物と少量の炭化物が混っている。3、4、5層は、有機物、焼土などを多量に含む層である。2層は、6・7層と類似している。1層は砂層である。全地点から発見された土坑中で、砂の堆積がみられたのは当土坑だけである。

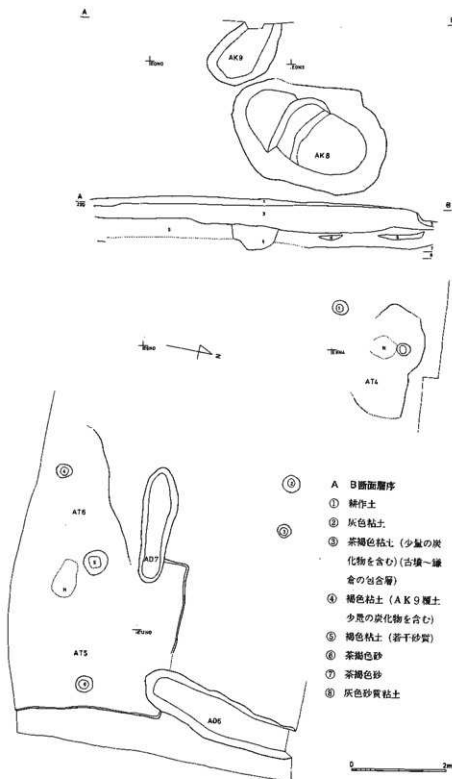
出土遺物は比較的多かったが、復元しうるものは少ない。1層を上層、2～5層を中層、6層を下層として遺物の取り上げを行ったが、No1のS字甕は上層、No2～4は中層の遺物である。しかし、No2、3は確実に2層内であるのに対し、No4は、5、6層にまたがって出土している。したがって、これらは土坑内遺物ではあるが、その出土状態と保存状態からは一括資料とはいえない。

AK9（第17図）

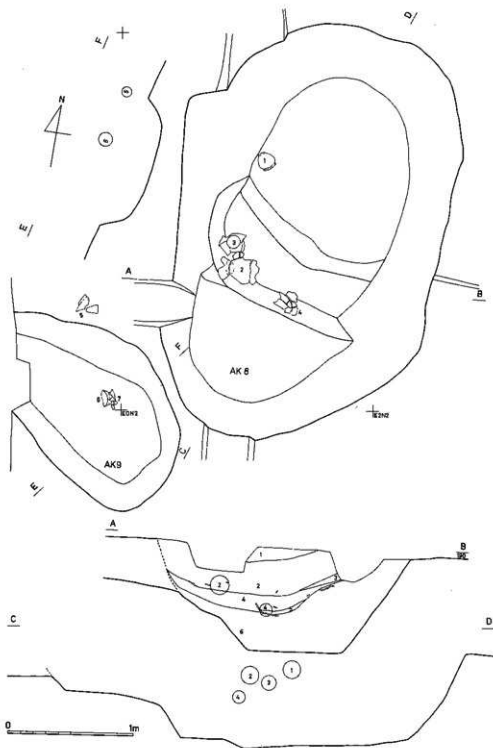
AK8に接して西側に発見された。一部は調査区外となるが、短径約1.1mで、長径は1.6m以上である。深さは、現状では約0.2mであるが、西壁断面図でみると約0.5mある。

内部の堆積土は、AK8とは極端に違って、有機物はほとんど含んでいない。

出土遺物は少量であるが、いずれも床面から浮いた状態で出土している。No5は、遺構の外側になるが、当土坑に含めて考えた。



第16図 A29地点全体図



A・B断面図層序

- ① 褐色砂 ② 褐色粘土 ③ 黒褐色有機土 ④ 暗褐色有機土（焼土、炭化物の薄層を含む）
⑤ 焼土 ⑥ 褐色粘土

第17図 AK8・9実測図

2、住居跡状遺構

AT4 (第18図)

AK8の調査を行うために水切り的小溝を掘ったところ、断面に炭化物の薄層が発見された。このため、南側は切断してしまったが、南に大きく伸びていた可能性はない。

土坑の発見面は、海拔180cm前後にあり、当遺構の炭化物の薄層は海拔165cm前後にある。不整形円形に分布する炭化物の中央部より若干西よりの部分に焼土がみられる。焼土の分布は、南北約60cm、東西約50cmで、中央部が若干窪んでいる。また、断面をみると中程に炭化物の間層を挟んでいるが、全体に良く焼けている。また、炭化物下の焼土は、下部にゆくにしたがつて徐々に色がうすくなり、粘土と明確な色別はできなくなる。いわゆる炉の根に当たると考えられる。

以上の焼土を炉と考え、炭化物の面が、本来ならば無遺物の層を約15cm低下した場所にあることから、竪穴住居跡の一部と考えた。

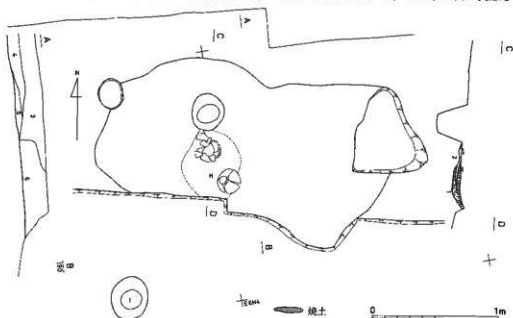
遺物は、いずれも炉跡の上から発見されたが、保存状態が悪い。

炉跡の北側に深さ約25cmのピットが発見されている。

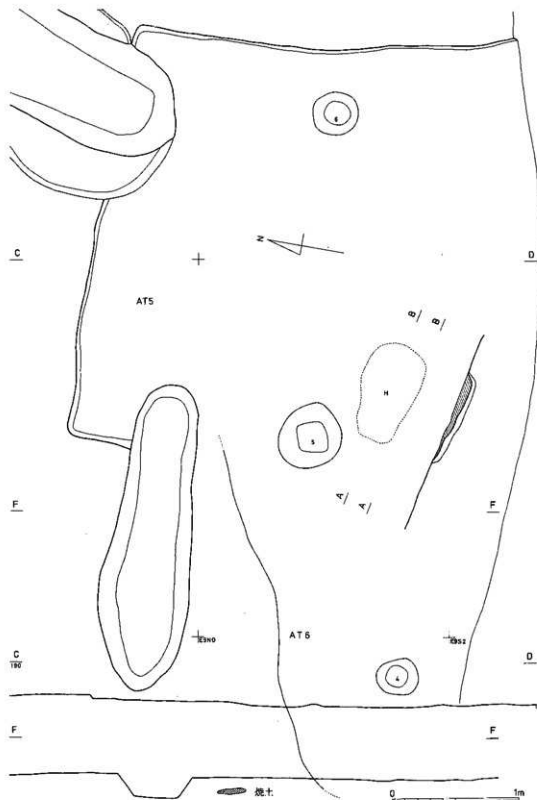
AT5 (第19図)

調査区周囲の水切り溝によって炭化物の薄層を発見した。炭化物の面は、海拔155~160cmの位置にあり、AT4とほぼ一致する。海拔180cmの面から除々に削り下げて平面形を検出しようとしたが、土色にはまったく変化がなく、少量の土師器片と炭化物がみられる程度であった。このためやむなく炭化物の面を追うことにした。

炭化物の面は、その分布範囲の中央付近では、堅く締っており、かつ、スライス状に剝離し



第18図 AT4突測図



第19図 AT5-6実測図

た。しかし、周辺部にゆくと炭化物自体も少なくなり明瞭に確認できなくなる。

この炭化物分布の限界を追った結果、図示したような隅丸方形と思われる範囲を知ることができた。また、それとは別に西側に大きく伸びる炭化物の分布をみたが、別の遺構と考えAT 6とした。

AT 5は、東西約3.3m、南北約3.6mであるが、南北は調査区外まで続くようである。また、AT 5内に含まれるピットにP 5、6がある、P 5は径50cm前後深さ約52cm、P 6は径約35cm、深さ約27cmであるが、伴うことは確認できなかった。

炉跡は、AT 5・6両方で一か所発見されたが、どちらに伴うとしても壁に接している。長径約80cm、短径約50cmの不整形形である。いわゆる焼土の根は、西側の方が厚いが、東側には焼土塊の層が8cm程みられ、主に使用されたのは東側と考えられる。したがって、炉跡は、想定されるAT 5の東壁から約1mの所に中心があることになるため、AT 5に伴うものと考えてもよいであろう。

AD 6・7と切り合っているが、両者よりは古い。

AT 6 (第19図)

AT 5と切り合った住居跡と考えられる。炭化物の分布状況を追求したが、住居跡の形態などは十分に把握できなかった。

P 4・5がこの住居跡に伴う可能性が強いとすれば、検出した炭化物分布の北限が、おおむね壁の付近と考えられる。

3、溝状遺構

AD 6

幅約1m、長さ約3.4mが確認された。一部調査区外になるが、ほぼ全体が調査されたものと考えられる。深さは約0.4mあり底面は平坦である。内部の堆積土は、褐色粘土にごく少量の炭化物を含んでいるが、遺構の見分けが困難な状況である。

遺物はまったく出土しないが、古墳時代前期であろう。

AD 7

幅約0.6m、長さ約2.5m、深さ約0.2mで、底面は平坦である。

土坑とも考えられるが、AD 6と関連する可能性もある。

遺物は出土していない。

ピット群

発見されたピットは、合計7個であるが、これらの内、P 2・3を除くと住居跡に伴う可能性が大きい。P 1は、径約30cm、深さ約22cmであるが、AT 4と関連する可能性がある。炉跡から約1.2mの距離にあり、一辺4m前後の住居跡を想定した場合には、ちょうど良い位置にある。仮に伴うとすれば発見面の海拔は約173cmであるから、住居跡床面からの深さは約30cmである。

P 2 は径約35cm、深さ約28cm、
P 3 は径約28cm、深さ約21cmで
ある。いずれも古墳前期に伴う
が性格不明である。

第4節 A30地点（第20図）

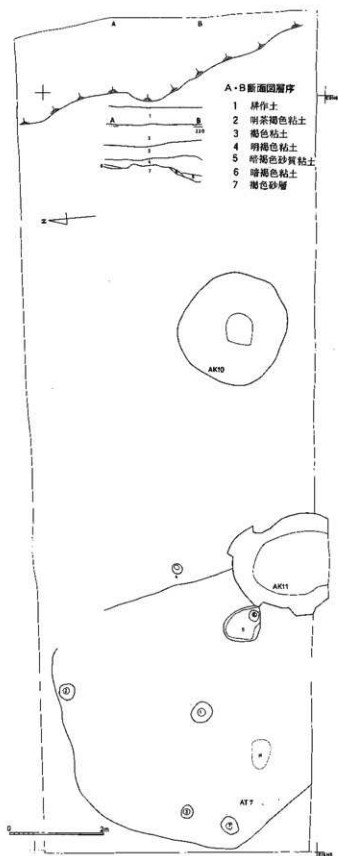
梅山字青木1131番地の畑であ
る。現在は、岡本正次郎氏、柴
田稔に換地されている。

土坑2、住居跡状遺構が発見
された。

第20図の断面図は、第1次調
査のグリット断面図である。こ
の部分は、今回の調査で、低地
に向って急激に下降する部分で
あることがわかった。2、3層
は東よりの部分では薄くなり、
東端には2層は存在しない。ま
た3層は、古墳時代後期ごろの
層と考えたが、平安時代の土器
も含まれている。7層は、A T
7の南東側に掘った収水溝では
海拔約130cmごろからはじまり、
西端部分とほぼ水平である。古
墳前期の遺構検出面を構成する
褐色粘土は、発掘区西端の攪乱
印を入れた部分で消滅する。

A K10などの遺構発見面は、
海拔200～220cmであり、西端の
古墳前期の層である6層との差
は70～80cmとなる。

A25地点の西側の古墳前期の
面が若干下降しているのと同じ
ような見方ができ、低地帯へ移



第20図 A30地点全体図

行する部分が発掘区西端にあると考えられよう。

1 土坑

A K10 (第21図)

径約2.4m、深さ約0.8mで、ほぼ円形プランを呈する。底面は凹地状になる。発見面は海拔220cmであるが、その以前から遺物の集中がみられる点を考慮に入ると、海拔230cm前後の位置に掘り込み面があると考えられる。

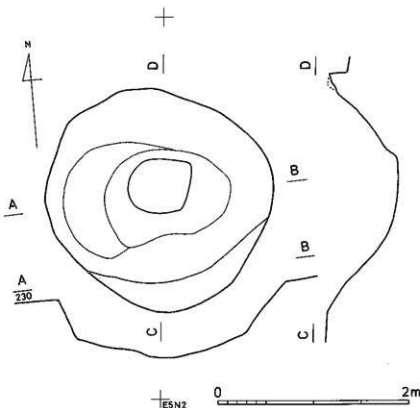
内部の堆積は、褐色粘土と黒褐色有機土とが交互にみられ、最下層は褐色粘土である。

出土々器は、最下層を除いて各層にあるが、黒褐色有機土中に多い。

A K11 (第22図)

A T7と切り合っているが、これよりは古い。

遺構の存在は簡単にわかるが、壁際の堆積土が、遺構を構成している粘土と類似しているため、不整形な発見状況となった。西から南西側が比較的旧状を表しているが、これにしたがえば、短径約2.2m、長径2.2m以上の楕円形プランを呈する。深さは、約0.6mである。底面は凹地状となる。遺構発見面は、海拔200cmにあり、プラスアルファを考えてもA K10より

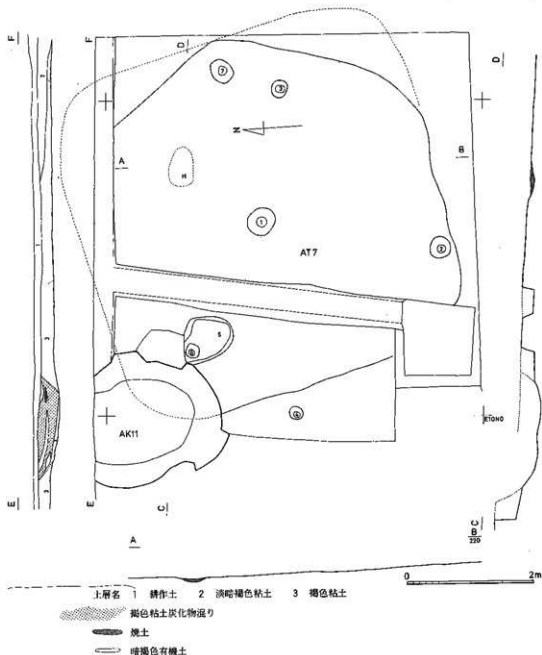


第21図 A K10実測図

は低いと考えられる。

AT 7 (第22図)

AK11の調査において、上層の一部が水平堆積をみせると同時に、東に向かって土坑外に伸びることがわかった。P 6 北側は、このための掘り過ぎである。その後、水切りの小溝を掘ったところ炭化物の層が発見された。炭化物の面を迫った範囲が実線で示したものであるが、北東側には炉跡も発見されたことから住居跡と考えた。破線は、炭化物の保存が比較的良好だった西側と土坑内での発見状況を基準として住居跡の規模を復元したものである。これによれば、



第22図 AK11・AT7実測図

一辺5.7m前後の隅丸方形の住居跡が考えられる。炉跡は、北東隅から約2mに発見された。短径約40cm、長径約60cmで、中央部が若干窪んでいる。

床面は、炉跡付近を中心に堅い部分が発見された。床面高は、海拔170～160cmで、南側が高。床面高と、AK11の発見面とを比較すれば、深さ30cm以上の堅穴になる。

柱穴は、古墳前期と考えられるものとしてP4～7がある。

法量は表に示したが、主柱穴となりうるものは存在しないように思われる。

遺物は、床面から土師器小破片が発見された。また、AK11内の水平堆積をした炭化物の上から土師器高坏脚部が2点発見されている。これらは、当住居跡に伴うと考えている。

3 ビット群

P1～3は、奈良時代より古くはないビットである。三者は「L」字状に配置がみられ建物跡を想定したが、一本足りないように思う。

第5節 青木遺跡出土遺物の概要

当遺跡出土遺物は、大半が土器である。第一次調査では、AK3から木器を発見しているが、今回は木片も採集できなかった。また、AK11から鉄器片らしいものも発見しているが、細片のため図化できない。

もっとも古い土器は、AK11の中層遺物中から発見した縄文時代後期あるいは晩期ごろの土器片である。

土器のほとんどは古墳時代前期に属するが、前I～II期ごろの例が多い。また、破片では弥生土器ともいえる資料も発見しているし、AX1発見資料などは、見解によっては弥生土器であろうが、明瞭に弥生土器といえるものは発見されていない。

5世紀代の資料としては、AT7出土資料などがある。しかし量的には少ない。

古墳時代後期の資料には、AT3号住居跡の土師器などがある。また、包含層からは、須恵器も発見されている。今回の調査が、遺跡でも高位置に当る部分であったために、発見量が少ないのであって、遺跡そのものは、後期にも栄えていたことは充分考えられる。

奈良から平安時代の資料も少なくないが、これらも遺跡周辺部の低地帯に近い場所の方が多いようである。

出土遺物の量の多少はあるが、当遺跡は、鎌倉時代までは継続した遺跡であろうことが出土遺物から考えられる。

これらの出土遺物のなかで、土錘をはじめとした漁具がまったく発見されていないことは注目される。周辺には、多く湖沼が発達し魚貝類が豊富であったことは、容易に知りうる事実である。当初から、大畑貝塚を形成したラグーンの残存した地域での集落であり、漁業への指向も考えていたのであるが、当遺跡に生活を営みはじめた時期から、すでに完全な農耕集落であ

表4 各ビットの法量

番号	径	深さ
P 1	45	49
P 2	30×40	46
P 3	30×35	52
P 4	20	12
P 5	70×90	11
P 6	20	13
P 7	22	22

(単位cm)

ったことは、今後の研究に役立つものと考えられる。

出土遺物個々については、表に整理した。また、比較的多くの資料を出土した土坑については、器種別の数量を表記した。しかし、組成比率は、資料のかたより等を考えなくてはならないし、主に土坑内資料という限定された遺構の例のため充分に指摘できない。強いというならば、古墳前期の段階でも実年代を4世紀とすることができる土器群中に占める脚付甕が、いわゆるS字甕を除外すると極端に少ないことが指摘できよう。

表5 器種別数量 (AK6中・下層)

	口	縁	頸	部	底	部	接合部	脚	部
壺	29				27	31			
脚付甕	平底甕に含む						5		
S字甕	5		10				8	16	
平底甕	7		30	壺に含む					
高 坏	1						23		
器 台							3	2	
埴	2		15						
鉢	1		3		1				

表6 器種別数量 (AK6上層)

	口	縁	頸	部	底	部	接合部	脚	部
壺	17				10	23			
脚付甕	平底甕に含む						2		
S字甕	3		12					11	
平底甕	3		8	壺に含む					
高 坏							8	2	
器 台							1		
埴	1		5						
鉢			1						

表7 器種別数量 (AK8)

	口	縁	頸	部	底	部	接合部	脚	部
壺	9				11	13			
脚付甕	平底甕に含む						1		
S字甕			5				5	3	
平底甕			6	壺に含む					
高 坏							8		
器 台	1								
埴									
鉢									

表8 器種別数量 (AK3)

	口	縁	頸	部	底	部	接合部	脚	部
壺	7				6	11			
脚付甕	平底甕に含む						13	1	
S字甕	2		13				4	3	
平底甕	3		9	壺に含む					
高 坏	3						8	3	
器 台									
埴			1						
鉢			1		3				

表9 青木遺跡出土遺物観察表

AD1 出土遺物

図版番号	特徴 (① 文様・器形の特徴、② 外面調整・成形の特徴、③ 内面調整・成形の特徴、④ その他の特徴) ※ 以下の表はすべて同じである。	備考
23 1-2	① 折り返し口縁の壺。口縁部に右下りの櫛目押圧沈線文を施す。口縁部内面に文様があるのかも知れないが、保存不良のため不明。② 頸部の一部に斜ハケがみられる。③ 不明。④ 保存状態がきわめて不良のため細部は不明である。	1、2は同一個体か。
23 3	① 折り返し口縁の壺。口縁部に左下りの櫛目押圧の沈線文が施されている。口縁内面には縄文が施された痕跡がある。② 斜ハケ、③ 不明	
23 4	① 肩部が若干張り、ゆるやかに外湾する口縁が付く。口縁端部には、櫛目押圧のきざみ目が施されている。② 胴部は斜ハケ、口縁部は縦方向の板ナデと思われるが、ナデの可能性もある。③ 器壁が剥落しているが、一部に横方向の板ナデがみられる。	
5	保存状態が悪く、細部は不明である。	
23 6	① 脚付甕の胴下部から脚取り付け部。比較的球形胴になると思われる。② 胴下部は主として斜ハケ。脚部は不明。③ 底部は横ハケ、最も下の部分だけナデ、上部は斜ハケ後ナデ、脚部はナデ。	
23 7-8	① 脚付甕の取り付け部。② 7の一部に斜ハケがみられる。③ 8の胴部内面底部には、横ハケがみられる。	
23 9	① やや内湾気味に外向する脚付甕の脚部。② 不明。③ 脚部天井部に指圧痕が顕著にみられ、いわゆるS字甕の脚と類似した調整がみられる。	1~12は一括資料とも考えられる
23 10	① 稜を持つ高环々部下半の破片。小破片からの復元のため、器形に若干の疑問が残る。特に、稜から下が平坦になるが、多少の傾斜を考えた。② 不明。別個体と思われる他の小破片では、稜から上は斜方向、下は横方向のヘラ磨きがみられる。③ 不明。	
23 12	① 高环取付け部の破片。いわゆる菊川式系の器形であろう。② 取付け部に縦方向のヘラ磨きがみられる。③ 不明。	
23 13-15	① いずれも高环脚部の破片、13、15は外湾気味、14は内湾気味の脚であろう。いずれも脚上部に三孔を有する。② 13、15は斜ハケ後ヘラ磨き、14は不明。③ 13、15はナデ、14は不明。④ 13、14の脚と環との取り付けは、ヘソを差し込む方法のようである。	13~15は、AD1上層遺物。
16	① S字甕の小破片。②、③ 器壁が完全に剥離し、不明。	

A K 3 出土遺物

23 17	① 若干下ぶくれする壺、底部は平底である。② 板ナデ後へう磨き、底部近くを除いて磨き痕は充分観察できない。③ 底部は、くもの巣状板ナデ。胴下部には板ナデ痕が残るが上半部はナデ。	
23 18	① 鉢、底部破片。いわゆる輪状底。② へう磨き。底部近くにハケ痕がある。③ 斜方向のへう磨き。	
23 19	① 脚付甕脚部。若干内湾気味に外向する。脚端部は平坦。② 荒い斜ハケ。③ 比較的細かい横ハケ。	
23 20	① 脚付甕脚部。外湾気味に外向する。脚端部はにぶく突っている。② 荒い斜ハケ、端部は横ナデ。③ 荒い斜ハケ。端部は横ナデ、天井部はナデまわし。	

A K 5 出土遺物

23 21	① 高坏脚部。裾部がラッパ状に大きく開き、上方にそり返る。二段に分かれて6孔を有する。② 細かなへう磨き、そり返った部分は横ナデ。③ 上半にはしほり痕がみられ、下半は斜ハケ。そり返る部分は横ナデ。坏部底部はへう磨き。	
23 22	① 高坏脚部。ゆるやかに外湾しながら外向する。脚端部は丸い。脚部中位に3孔がある。② 斜ハケ後縦方向のへう磨き、裾部は横ナデ。③ 上部にはしほり痕、その下に横方向の板ハケがみられる。中位はナデ、裾部は横ナデ。④ 坏部の側から棒状の粘土を差し込んだ痕跡が明瞭に残る。	
23 23	① 高坏脚部。笠状に開き、3孔を持つ。② 斜ハケ後上半は横方向のへう磨き、下半は軽いナデ。③ ハケ痕が多く残るが、軽いナデもみられる。天井部はナデまわし。坏部底部はハケ後へう磨き。	
23 24	① 鉢か。底部は若干窪んでいる。② ハケ痕が多く残っているが、横方向のへう磨き。③ ナデあるいはへう磨きと思われる。	
23 25	① 二重口縁の壺。口縁部は大きく外方に開く。端部はやや丸味を持ち、下方に肥厚する。口縁内面に細かな縄文がみられる。② 斜ハケ後横ナデ。③ 一部にハケ痕も残るが、ナデと思われる。	

A D 4 出土遺物

23 26	① 高坏々部。下部の平坦面と上部に移行する部分に稜を持つ。② へう磨き痕がみられる。③ 器壁剥落のため不明。	
23 27	① 壺。大きく突出する底部を持つ。胴下半部にわずかな稜を持つ形態であろう。② 器壁が剥落しているが、現地での所見はへう磨き。③ 器壁剥落のため不明であるが、底部にハケ痕らしい部分がある。	

AD 2 出土遺物

23 28	① S字寝。頸部は急に屈曲する。口縁部内面の段は顕著でない。口縁端部は平坦であるが、沈線状の窪みがある。② 口縁部横ナデ。肩部は左下りのハケ。頸部は棒状工具を押し当てたナデ。③ 口縁部横ナデ。頸部はへう削り。胴部はナデ。	
23 29	① 査あるいは長胴の寝であろう。口縁部は折り返し状にみられるが、端部のつまみ出しによるものである。端部は外下方に伸びる。② 口縁部は横ナデ、頸部は棒状工具を押し当てたナデ、胴部はへう磨きと思われる。③ 口縁部以下すべてへう磨き、あるいは丁寧なナデ。	
30	① 土器底部。	

AX 1 出土遺物

24 1	① 壺底部であろう。② 底部近くの一部に斜ハケがみられる。③ 不明。	
24 3	① 板細片からの復元実測、折り返し口縁の張である。口縁部には節目押圧のきざみ目文が施されている。② 不明。③ 不明。	
24 4	① 脚付寝であろう。胴部は球形に近く、最大径は中位にある。頸部から口縁部にかけては、ゆるやかに外反する。口縁端部に平坦面がある。② 胴部は斜ハケと思われるが、下部は器壁が剥落して不明。頸部から口縁端部にかけては横ナデ。③ 胴部は板削り後ナデ、頸部から口縁部は横ナデ。④ 胴部外面下部の器壁剥落は、加熱使用による可能性がある。	4、9内にも混在。
24 5	① 脚付寝であるが、脚部を欠失している。肩の張らない細長い胴部で、最大径は上から1/3にある。頸部から口縁部は、「く」字状に外反する。口縁端部は丸いが、保存不良のため明確ではない。② 胴部の一部に斜ハケがみられる他は不明。③ 不明。	7内にも混在。
24 8	① 胴部は肩の張らない下ふくれ、頸部には稜があり、口縁部は袋状となる。口縁端部はわずかに外側へつまみ出され、下内向する面を持つ。脚部はロート状に開き、三孔がうがたれている。② 口縁端部を除いてへう磨きであろうが、口縁と脚部の一部にみられるのみで、他は不明。口縁端部は横ナデ。③ 口縁部上半と端部は横ナデ、胴部は板ナデ後ナデ、脚部にはナデ痕のみがみられる。	胎土に石英質の小石を多く含む。
24 9	① 脚付寝の脚部であろう。脚部は外湾気味に外向し、脚端部は平坦。胴部は球形に近いと思われる。② 胴部および脚接合部の一部に斜ハケがみられる。③ 胴部底部は板削り、下部は縦方向の板ナデ、それより上は板ナデ後ナデと思われる。脚部天井部はナデ、上半は斜方向の板ナデ、下半は不明。④ 胴部内面に炭化物付着。	4と同一個体の可能性もある。
24 10	① 胴部最大径は下半にあり、直線的に底部に至る。肩部は若干張る。② 不明。③ 不明。④ 有文の可能性もあるが、保存状態がきわめて悪い。	

24 11	① 最大径は胴部中位にあり、肩の張らない細長い胴部である。頸部は急に屈曲し、若干内湾気味の口縁部を持つ。口縁端部は丸い。② 器壁剥落のため不明確だが、口縁部は横ナデ、胴部は斜ハケと思われる。③ 胴部はナデと思われる。口縁部は不明。④ 胴部外面下半、口縁部外面に煤が付着。胴部内面下部から底部に炭化物付着。	
24 12	① 壺頸部であろう。②、③ 保存状況が極めて悪く、文様、調整等すべて不明。	
24 13	① 頸部は「く」字状に外反し、口縁部は折り返し口縁、口縁内面には、内向する平坦面を持つ。胴部は、ふくらみをもって下部に至り、わずかな稜を有する。稜以下は、比較的直線的に底部に至ると考えられる。口縁部外面には、櫛目押圧のきざみ目、内面には縄文が二段施されている。内面の縄文は、頸部近くにまで達している。肩部には、櫛目押圧の縦縄文が二段羽状に施され、その下に縄文が施されている。② 器壁剥落のため不明。頸部には、縦方向のへら磨きがあるようにもみえる。③ 不明。	
24 14	① 球形に近い胴部に、外湾気味に外向する口縁部が付く。口縁端部は丸い。頸部の屈曲は比較的激しく、内面には稜を有する。② 胴部は斜ハケであるが、下部は縦ハケに近いと思われる。斜ハケの後に、ごく一部に限って板ナデ風の調整がみられる。口縁部は、縦ハケ後横ナデ。③ 胴部下半は斜ハケ後板ナデ、上半は横ハケ後板ナデであろうが充分に観察できない。口縁部は横ハケ。④ 肩部付近を除く外面に煤が付着している。	7内に同一個体が多く含まれていた。
24 15	① 肩の張らない細長い胴部から、やや内湾気味に外向する口縁部が付く。口縁端部は丸い。② 保存状況が悪く不明確だが、胴部に斜ハケないしは縦ハケ、口縁部は横ナデであろう。③ 不明瞭であるが、下部は板ナデないしはナデである。④ 胴部内面下部に煤が付着。	

AK6 出土遺物

25 5	① 弥。最大径は胴部中位にある。底部は突出した平底、胴部はやや偏球形、頸部から口縁部は大きく外向する。口縁端部は丸い。② 胴下部は斜ハケ後不定方向のへら磨き。上部は斜ハケ。肩部付近は摩耗して不明。口縁部は斜ハケ後端部付近のみ横ナデ。③ 胴部から底部は、一部にハケが残っているがナデ。口縁部は横ハケ。	AK6一括。
25 13	① No.5と類似した壺。最大径は胴部中位にある。突出した底部を持つが、中央が若干窪む。口縁端部は尖っているが、器壁が剥落したため、本来は丸いと思われる。② 胴下部は斜ハケ後へら磨き、底部はナデによるが一部に指の圧痕がある。胴部上半は斜ハケ。肩部より上は不明。③ 底部から胴下部はナデ。胴中位から上部は板削り後ナデ。頸部には横方向の板削りがみられる。口縁部は横ハケ後軽いナデ。④ 底部はいわゆる輪状底。胴部の接合状況がよくわかる。	AK6一括。
	① 壺。焼きひずみがみられる。破縁で示した部分が本来の器形か。	

25 7	頸部はゆるやかに外湾し、口縁端部は下方に伸び肥厚する。口縁部内面に、櫛目押圧の擬縄文が二段めぐっている。② 胴部から頸部付近は、主として斜ハケ。一部にナデがみられる。口縁部上半と口縁端部は横ナデ。③ 胴部には巻き上げ痕が良く残っている。頸部の一部に板ナデがみられる。口縁部は横ナデ。④ 焼成温度が高く、胎土が薄綿状になっている。土器のひすみは乾燥時ではなく焼成時のものであろう。	AK6 準一括。
25 19	① 壺。No7と類似している。口縁端部は下外方に伸び若干肥厚する。口縁内面に櫛目押圧の擬縄文が二段めぐる。② 頸部の一部に斜ハケがみられる。③ 不明。④ No7ほどではないが焼成温度が高い。No19出土地点から東方約1mの地点に同一個体がみられた。	AK6 準一括。
25 14	① 壺。球形胴で底部は突出する。頸部は細い。② 胴最下部から底部にかけてへう磨きがみられる他は、すべて不明であるが、ハケ調整ではない。③ 胴部の一部に板ナデがみられる。肩部から頸部にはしほり痕が顕著。	AK6 準一括。
25 21	① 受口状の二重口縁壺か。胴部は球形で、頸部は若干内湾する。② 頸部は斜ハケ、胴部は斜ハケ。ハケ目は非常に細かい。③ 頸部にへう削りの可能性を持つ部分がある以外不明。	中層
25 6	① 甕。胴部は球形で、底部は平底気味になり中央部が窪む。口縁部は大きく外向し、端部は丸い。肩部には櫛描横線文と篋描連弧文がみられる。② 口縁端部は横ナデ。他はすべてへう磨きと思われるが、観察できない部分も多い。③ 口縁端部は横ナデ、口縁部は縦方向のへう磨き。胴部は保存不良のため不明であるが、一部に板ナデ痕がみられる。④ 胴部に灰が付着している。胎土は在地のものとは変らないが、横線文施文原体は、在地のものではないように思われる。	AK6 一括。
25 3	① 壺。最大径は胴中位よりやや下にあり、胴下部にわずかに稜がみられる。底部は突出した平底。② 頸部から上肩部はハケ、胴部から底部は斜ハケ後ナデ。③ 底部はくもの巣状ハケとナデマワシ。胴部は棒状工具によるナデ。口縁部は横ナデ。	AK6 一括。
25 23	① 壺。胴部は球形で底部は平底。底部を除く外面と、頸部以上の内面は丹彩。胴下部に焼成後の穿孔がみられる。② 胴部は指状のもので磨き風のナデ。肩部から頸部は斜ハケ、底部には指痕がみられる。③ ナデ調整と思われる。	AK6 一括
25 32	① 壺口縁部。口縁端部は丸い。② 頸部の一部に斜ハケがみられる。口縁部は横ナデ。③ 口縁部は横ナデ。	中層
25 1	① 器台。脚端部を欠失。受部は浅い皿状で、口縁端部は丸くおさまられている。脚部は内湾気味に外向した後、大きく外に開く。② 口縁端部は横ナデ、他は斜ハケ後へう磨き。③ 受部は不明、脚部上半はしほり、下半には横ハケがみられる。	AK6 一括。
26 9	① S字甕。保存不良のため接合不能であるが、出土状態から完形品であることがわかる。	AK6 一括。
	① S字甕。口縁部はシャープさを欠き、端部は丸く、内面の段も顕	

26 10	著でない。② 脚部はナデ、接合部以上は斜ハケ。胴部のハケは下方からはじまり、四段に別れる。四段目のみ左下がりの斜ハケ。横ハケは一単位のみである。③ 脚部下半は横ナデ。上半は板削り。天井部はナデマワシ。胴部全体に横および斜ハケがみられる。頸部はナデ。口縁部は横ナデ。④ 縁が付着している。	A K 6一括。
26 11	① S字襷。口縁部はシャープさを欠き端部は丸いが、内面の段は明瞭であり、No10とは別形式。脚部欠失。② 胴部のハケ目は5段に別れ最上段は左下り。最上段のハケは、上から二段目に先行して行われている。横ハケは一単位である。頸部には棒状工具を押し当てたナデがみられる。口縁部は横ナデ。③ 胴部は板削り後ナデ。肩部には圧痕が残る。頸部はへら削り後軽いナデ。口縁部は横ナデ。④ 胴部に縁が付着。	A K 6一括。 写真図版の脚は、27-23。
26 12	① 襷、広口短頸部ともいえる。調査時には図に示したような口縁部が観察できた。② 底部接床面も含めて全面がへら磨きと思われるが、保存不良のため不明。③ 不明。④ この器形は襷、鉢、壺のいずれともいえるかもしれない。	A K 6一括。
26 20	① 壺、襷ともいえる。長胴で最大径は中位にあり、底部は平底である。口縁部は「く」字状に屈曲し、端部は丸い。② 器壁が剥落しているため不明であるが、口縁部は横ナデのようである。③ 不明。	A K 6一括。
4	① 鉢。球形の胴部を持ち、底部は突出した平底。口縁部は「く」字に屈曲し、端部は丸い。② 胴部は細かいハケ。底部の一部と底部接床面にへら削りがみられる。口縁部は横ナデ。③ 胴下部は斜ハケおよびナデ。上半は斜ハケ後板削り。口縁部は横ナデ。	A K 6一括。
22	① 壺。胴下部に稜を持つ形式。② 胴下部から底部の一部にハケがみられる。他は器壁剥落のため不明。③ 不明。	中層。
2	① 高坏。碗状の坏部を持ち、口縁端部は丸い。② 斜ハケ後、横方向のへら磨き。口縁端部は不明。③ へら磨きと思われるが不明。	A K 6一括。
40	① 高坏。皿状の坏部を持ち、脚部は直線的に外向する。② 口縁および脚端部は横ナデ、他はへら磨きと思われる。③ 坏部底部はナデマワシ、他はへら磨きと思われる。脚部天井部はナデマワシ、他は横ナデ。	A K 6一括。
27 1	① 受口状二重口縁壺口縁部。小破片からの復元。② 口縁部接合部はへら磨き、中位は斜ハケ。上半は横ナデ。③ 口縁端部の平沢面および内面は、横方向のへら磨き。	中層。
27 2	① 二重口縁壺。胴部は球形と思われる。頸部はやや内向気味に伸びる。頸部上端が若干肥厚しており、受口状口縁が付くと考えられる。② 不明。③ 肩部にしぼり痕らしい部分がある。	上層。
27 3	① No 2に類似した器形。頸部に隆帯がめぐる。頸部はやや外向気味に伸びる。② 不明。③ 頸部に指痕、肩部にしぼり痕がみられる。	上層。
27 4	① 二重口縁壺。口縁部は朝顔状に大きく開き、端部は丸く上方に肥厚する。② 口縁上半は横ナデ、下半は斜ハケ。③ 器壁剥落のため不明。	上層。
	① 土器底部。② 底部接床面はへら磨き、他はハケ。③ くもの巣	

27 5	状ハケがみられる。④ 底部成形の状況がわかる破片。底部の中心として円板を作り、その側面から粘土紐を巻き上げている。	上層。
27 6	① 壺口縁部。口縁部はラッパ状に開き端部は丸く下方に肥厚する。 ②、③ 不明。	上層。
27 7	① 埴。口縁部は若干「S」字状の屈曲をもって開く。端部は丸く外方に肥厚する。②、③ 不明。	上層。
27 8	① 埴。極少破片からの復元。やや下膨れする胴部であろう。器壁は完全に剥落しているが、衝描横線文と簡拙連弧文がみられる。② 不明。 ③ 頸部にしほり痕、胴部に指圧痕がみられる。	上層。
27 9	① 器台。脚部は外湾しながら開く。受部はやや上方に伸び、端部を上方につまみ出している。② 不明。③ 不明。④ 完成した脚部上端の側面に台部を貼り付ける成形がみられる。	上層。
27 10	① 高環。大型高環になるであろう。②、③ 内外面共にヘラ磨きであろう。④ 脚との接合状況がわかる。完成した脚部上端の側面に環部を貼り付けてゆく成形であろう。Na25のような脚が付くと思われる。	上層。
27 11	① 高環。いわゆるヘソ。④ 中央部が突出したボタン状の粘土を脚部に差し込むものと考えられる。第22図26にもみられる。このヘソがとれた状況がNa27のようになるとも考えられる。	上層。
27 12	① 高環。いわゆるヘソ。④ 脚部に差し込んだ後に、脚部天井部になる部分をナデまわしによって調整する手法によってできるヘソであろう。第22図23などはその例かも知れない。	上層。
27 13	① 甕、鉢、壺のいずれか。丸味を持った胴部に短かい口縁部が付く。口縁端部は丸い。② 胴部と口縁部下半はヘラ磨き。口縁部上半と頸部は横ナデ。③ 口縁部はヘラ磨き、胴部はナデ。	上層。
27 14	① S字甕。口縁部はシャープさを欠く。端部は平坦で外方に肥厚するが、中央部が沈線状に窪む。① 口縁部は横ナデ、頸部は棒状工具によるナデ、肩部はハケ。③ 口縁部は横ナデ、頸部は横ハケ後ナデ。わずかに横ハケが残る。	上層。
27 15	① S字甕。口縁部は比較的上向きで端部は丸い。内面の段は顕著でない。② 口縁部は横ナデ。頸部には棒状工具を押し当てた部分がない。肩部のハケ目は左下り。横ハケは2単位分施されている。③ 口縁部は横ナデ、頸部はヘラ削り後ナデ。胴部はナデと思われる。	上層。
27 16	① S字甕。全体に厚手に作られているが、口縁部下部は特に厚い。口縁部内面の段は、わずかにみられる程度。端部は下外方に肥厚する。 ② 口縁部横ナデ、肩部は左下りのハケ、横ハケも確認できる。③ 頸部はヘラ削り後かいるナデ。	上層。
27 17	① 二重口縁壺の口縁部上段の破片であろう。プロローションはNa1に類似している。②、③ 器壁剥落のため不明。	中層。
27 18	① 二重口縁壺。口縁部下段は比較的短い。内面で見ると接合部の段はわずかにみられる程度であるが、外面では大きく肥厚している。端	中層。

	部は丸く下方に肥厚する。② 口縁部上部にわずかに横ナデ痕が残る。 ③ 口縁部下段にわずかにへう磨き痕がある。	
27 19	① 二重口縁強。Na18と類似しているが、口縁端部は面を持って下方に肥厚する。頸部から口縁部にかけては急激に屈曲する。頸部はやや外方に伸びる。口縁端部と内面上部に細かな縄文が施される。② 端部を除いて斜ハケ後横ナデ。③ へう磨き痕がわずかにみられる。	中層。
27 20	① 甕。長胴の甕であろう。口縁部はやや内湾気味に外向する。② 口縁部は斜ハケ後横ナデ。胴部は斜ハケであろう。③ 口縁部は斜ハケ後へう磨き。胴部は斜ハケ、一部にその上から横ハケがみられる。	中層。
27 21	① 壺あるいは甕。口縁部は「く」字に外向し端部は丸い。② ナデと思われる。③ 口縁部は斜ハケ、肩部には指の圧痕がみられる。	中層。
27 22	① S字甕。板少片からの復元。口縁端部は摩耗している。② 口縁部は横ナデ、肩部は斜ハケ。③ 口縁部は横ナデ。頸部はへう削り後ナデ。	中層。
27 23	① S字甕脚部。② ナデ後上部のみ斜ハケ。③ 下部はナデ、上部は指で押してある。甕部内面はくもの巣状のナデマワシ。	中層。
27 24	① 高坏脚部。接合部の棒状粘土が欠失している。脚部中位から急に開く。6孔と思われる。② 斜ハケ後へう磨き。③ 下半は板ナデ、上部の柱状の部分はナデと思われる。	中層。
27 25	① 高坏脚部破片。直線的に外方に大きく開く。4孔がみとめられる。② 器壁が剥落しているが、縦方向のへう磨き痕がみられる。③ 天井部付近にしぼり痕がみられる。④ 接合部は棒状粘土の差し込みと思われる。	中層。
27 26	① 高坏。坏部は下部に稜を持ち、上部は直線的に外向する。下部は若干内湾気味に外方に開くと思われる。② 坏部稜以下接合部は横方向のへう磨き。他は縦方向のへう磨き。③ 器壁剥落のため不明。	中層。
27 27	① 高坏接合部。接合部分のボタン状粘土塊が剥離している。孔の数は不明。② 不明。③ 脚部天井部の一部に板ナデがみられる。	中層。
27 28	① 小型器台脚部か。外湾気味に外向した後、内湾気味に外向する。② 斜ハケ後縦方向の板削りを行い、後に軽い横ナデがみられる。③ しぼり痕が顕著にみられる。	中層。
27 29	① 甕。肩の張らない細味の胴部に、やや内湾気味の口縁部が付く。端部は丸い。② 胴部はハケ、口縁部は横ナデ。③ 胴部は斜ハケおよび板ナデ。口縁部は横ハケ。	下層。
27 30	① 脚付甕脚部。② 荒い斜ハケの上から一部ナデがみられる。③ 甕部底部はくもの巣状のハケ、最底部は横ナデ。脚部天井部および上端はナデ、下部は横ハケ。	下層。
27 31	① 高坏脚部。外湾しながら大きく外向すると思われる。② 脚部は斜ハケ後縦へう磨き。他は不明。③ 上部にしぼり痕がみられるが他は不明。	下層。

AK7 出土遺物

28 11	① 壺。肩の張らない胴部にやや内湾気味に外向する口縁が付く。口縁端部は器壁剥落のため不明。② 頸部以上不明。胴部は斜ハケ。③ 不明。	
28 24	① 甕。球形胴にわずかに「S」字状になる口縁部が付く。② 胴部の一部にハケがみられる以外不明。③ 不明。	
28 10	① 壺。肩部はあまり張らず、口縁部は内湾しながら外向する。いわゆるひさご形の壺。② 不明。③ 頸部にナデ痕、肩部から胴部に指圧痕がみられる。	
28 1	① 広口壺。胴下部にわずかに稜を持つ。口縁端部は丸い。口縁部に不整形な穿孔が2個みられる。② 口縁上部から端部は横ナデ、胴部上半はハケ調整とナデ調整、下半は不明。③ 口縁部は横ナデ、肩部はしぼり、胴部には板削りがみられる。下半部は不明。	
28 7	① 壺。底部のつくりは厚くて粗雑。② 一部にハケが残る以外不明。③ 不明。	
28 4	① 高环頸部。やや内湾気味に開く。4孔がある。② 不明。③ 下半部にハケがみられる以外不明。	
28 25	① 鉢。球形胴の鉢であろう。口縁端部は欠失しているが、調査時の所見では図のようである。端部に向って急激に薄くなる口縁を持つ。② ハケの痕跡がみられる以外不明。③ 口縁部は横ハケ、頸部以下は板ナデ状の削り。	
28 2	① 甕。肩の張らない胴部に、わずかに外向する口縁が付く。端部は丸い。② 口縁上部から端部は横ナデ、他は斜ハケ。③ 端部は横ナデ。口縁部は横ハケ、他はナデ。	
28 23	① 壺底部。突出した平底であるが、中央部がやや窪む。② 底部と底部付近は横へう磨き。他は斜ハケ。③ 底部はくもの巣状ハケ。④ 底部接床面に木葉痕がある。	AK6N22と同一個体。
28 41	① 高环々部。塊状の環で下部に横ナデによって作った稜がある。②、③ 器壁がすべて剥落して不明。④ 他の土器に比較して胎土に砂粒が多い。	41、16、17は、他の資料により高位置から出土している。
28 16	① 受口状の二重口縁であろう。端部は丸い。② 斜ハケがかすかにみられる。③ 不明。	
28 17	① 壺。胴下部に稜を持ち肩部は張らない。口縁部はやや外湾気味に外向する。② 頸部以上は斜ハケ後横ナデ。胴部上半は斜ハケ後横ナデ。下半は横へう磨き。底部近くは縦へう磨き。③ 口縁部上下は横ナデ、下半は横ハケ、胴部は斜ハケ後横ナデ。④ 胴部の横ナデは細かな二次ハケとも考えられる。	

AX2 出土遺物

28	① 壺。胴下部に稜を持ち、胴部は若干丸味を持つ。口縁部は外湾気	土器柄か。
----	---------------------------------	-------

15	味に外向する。端部は丸い。② 口縁上端と端部は横ナデ、胴部上半は細かな斜ハケ。下部の稜から上は横へう磨き、下は斜へう磨き。③ 口縁端部は横ナデ。胴部は板ナデ、底部はくもの巣状ハケ。	
----	--	--

AK4 出土遺物

29 1	① 壺。底部は突出した平底、胴下部に稜をもち最大径は中位よりやや下にある。細身の胴部にゆるやかに外湾しながら外向する口縁部が付く。口縁端部は丸い。② 口縁端部は横ナデ。稜付近から上は斜ハケであるが部分的にナデがみられる。下部は斜ハケ後不定方向のへう磨き。底部にはハケが残る。③ 口縁端部は横ナデ。口縁部は横ハケ。頸部はナデ。胴部は板削り。底部はへうで掻き取るような削り。	棺蓋上の供献か。
29 7	① S字寝。肩部が張り、口縁部はゆるやかに外向する。口縁部の段は甘い。口縁端部や若干尖っているが丸くおさめられている。② 頸部から口縁部は横ナデ、肩部から胴部は斜ハケだが、胴部の斜ハケが不揃い。肩部の横ハケは2単位。③ 口縁部は横ナデ、胴部には指圧痕がみられる。頸部の横ハケは明瞭に残る。	
29 9	① 高坏。やや内湾気味に外向し、下部は大きく開く。上部に3孔がある。② 胴部は横ハケ後縦へう磨き。③ 保存不良のため不明。	
29 5	① 鉢。脚付甕であろう。口縁部は「く」字に外向する。口縁端部にはきざみ目か施される。② 口縁部は縦ハケ後横ナデ、肩部は斜ハケ。③ 口縁端部付近は横ナデ、他の口縁部は横ハケ、肩部はナデ。	
29 10	① 壺。接合できないうち同一個体であろう。球形に近い胴部であるが、下部に稜がある。底部は小さな平底。② 胴部はナデ、頸部はへう磨きの上からナデ。底部に斜ハケがみられる。③ 頸部はへう磨き後ナデ。他はナデ。	

AT1 出土遺物

29 11	① S字寝。頸部から口縁部にかけては、急に屈曲する。口縁部の段は明瞭で、端部は丸くおさめられている。② 肩部は左下りの斜ハケの上に横ハケが1単位めくる。口縁部は横ナデ、頸部には棒状工具によるナデがみられる。③ 口縁部は横ナデ、頸部はへう削り後ナデ。肩部はナデ。	11～13はAT1一括。
29 12	① 埴。偏球形の胴部から急に屈曲し、内湾気味に外向する口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめられている。口縁部と胴部の比率は約1:1、口径と器高の比率は約3:2。② 胴部下半にへう磨きがみられるが他は不明。③ 胴部下半の一部にへう磨きがみられるが他は不明。④ 底部は若干窪む平底で、ナデマフシがみられる。	
29 13	① 脚付甕。偏球形の胴部にやや外湾気味に外向する口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめられている。② 口縁部は横ナデ、肩部以下は斜ハケ。③ 口縁部は横ナデ、胴部は板削りと思われる。	

AT 3 出土遺物

29 14	① 高坏。胴部は短かく、大きく外向する。坏部は碗状になり、口縁部はやや外向する。口縁部は丸い。②、③ 器壁剥落のため不明。④ 達考新編年Ⅲ期中葉の須恵器小片と伴出。	
---------------	--	--

AD 3 出土遺物

29 37	① 脚付甕。胴上半以上欠失。細身の胴部にやや内湾気味に外向する脚が付く。脚端部は丸い。② 胴部は不定方向の斜ハケ、脚部は斜ハケ、脚端部は横ナデ。③ 胴部は板ナデ、胴部底面は横ハケ。脚部は主として横ハケ。脚端部は横ナデ、脚天井部はナデマワシ。	27-29とよく似ている。
---------------	--	---------------

青木遺跡出土須恵器

29 15	① 有蓋高坏か。口径16cm、最大径18.2cm。口縁部は丸くおさめられている。②、③ 体部の約1/3がへう削り、他はナデ。内面には口クロ成形痕がよく残っている。	A 29地点出土。
29 16	① 蓋坏蓋。口径10.2cm、最大径12cm、器高3.2cm。擬宝珠状つまみが付く。②、③ 外面天井部付近にのみへう削りがみられる。	A 29地点出土。

AK 8 出土遺物

30 2	① 受口状二重口縁壺。肩の張らない胴部からゆるやかに頸部へ移行する。口縁部は受口状となり、端部付近でわずかに外湾する。口縁部は下外方に伸びる平坦面を持つ。② 頸部は板ナデ後ナデ、肩部以下は斜ハケ後不定方向のへう磨き。口縁部下半は斜ハケ、上半は横ナデ。③ 胴部下半は板ナデ、上半には巻き上げ痕がよく残り、上から下への指圧痕がみられる。頸部から口縁部下半は不定方向のハケ後ナデ、口縁部上半は横ナデ。	2層。
30 8	① 壺。口縁部は折り返し口縁、直線的に外行し、端部付近にわずかな稜を持って外湾する。端部は下外方に伸びる丸味をもった平坦面をもつ。② 口縁部横ナデ、頸部斜ハケ。③ 口縁部稜以上は横ナデ、他は横ハケと思われる。	中層。
30 1	① S字襷。中型のS字襷、最大径が胴部中位にある。頸部から口縁部にかけては急に屈曲する。口縁部の段は甘く端部はやや外方に肥厚し丸くおさめられている。② 胴部から肩部は斜ハケ。斜ハケは4段に分かれ、下3段は下から上へ、上1段は上から下へのハケ。肩部の横ハケは1単位。③ 胴部はナデ、肩部上半から頸部はへう削り。口縁部は横ナデ。	1層。
30 4	① 壺。球形の胴部から外湾気味に直向する頸部に至り、口縁部は大きく外向する。口縁部は折り返し口縁。② 胴部は不定方向のハケ。頸部から口縁下半は斜ハケだが、一部にナデがみられる。口縁部はナデないしは横ナデ。③ 胴部は斜ハケ後ナデ、頸部から口縁部は斜ハケ後一	4・5・6層。

	部ナデ。	
30 3	① 広口壺。球形の胴部に外湾気味に外向する短い口縁部が付く。端部は下外方に肥厚し、丸くおさめられている。②、③ 器壁剥落のため不明。	
30 10	① 高坏。坏部下部に稜を持ち、直線的に外向する坏部を持つ大型高坏。脚部は欠失しているが、3孔がみられる。②、③ 接合部にへら磨きかみられる以外不明。	2層。
30 9	① 高坏脚部。直線的に大きく外向し、下端でさらに外湾する。孔は2段に分かれ6孔である。②、③ 不明。	中層。
30 11	① 器台か。下部に稜を持つ皿状の受部から、さらに外方に大きく伸び、口縁端部は上方につまみあげられている。②、③ へら磨きとも思われるが不明。	中層。

AK9出土遺物

30 5	① 広口壺。胴部は球形と思われる。口縁部はやや外向気味に伸び、端部は外方に肥厚し、丸い。② 胴部は斜ハケ後へら磨き、口縁部下半は縦ハケ、上半は横ナデあるいはナデ。③ 不明。	遺物の外側から出土。
30 6	① 壺。受口状にはならないが、受口状二重口縁の系譜であろう。胴部はややなで肩になり、頸部は屈曲し、外湾気味の口縁が付く。口縁は幅の広い折り返し口縁となり、端部は丸い。② 頸部の一部に斜ハケがみられる以外不明。③ 頸部から口縁部は斜ハケ、胴部には上からみて右回りの巻き上げ痕がよく残っている。指圧痕は、下から上に向っている。	
30 7	① 高坏脚部。外湾しながら外向する細身の脚、3孔がみられる。②、③ 器壁剥落のため不明。	

AK10出土遺物

31 1	① 壺。最大径は胴部中位にあり、突出した底部をもつ。口縁部は外方に短かく伸び、端部は丸い。② 口縁部は斜ハケ後広いナデ、肩部は斜ハケ、胴部中位は不定方向のハケ後、板ナデおよび広いナデ、胴下部は斜ハケ、底部はナデ。③ 口縁部は横ハケ、他はナデ。④ 胴部以下と口縁部は直接々々できないが同一個体。	AK10上面出土。
31 2	① S字寝。口縁部はゆるやかに屈曲し、口縁部の段は甘い。口縁端部は丸くおさめられている。②、③ 器壁剥落のため不明。	AK10上面出土。
31 3	① S字寝脚部。②、③ 保存不良。④ No.2の脚の可能性が高い。	AK10上面出土。
31 4	① 脚付寝脚部。②、③ 保存不良のため不明。	上層。
	① 壺。頸部は急に屈曲し、口縁部につづく、口縁部は折り返し口縁。	上層。

31 5	② 口縁部は横ナデ、他は斜ハケ後軽いナデ。③ 口縁部上半は板ナデ、他はナデ。	上層。
31 6	① 高坏接合部。坏部との接合状況がよくわかる。ボタン状粘土塊を挿入して脚部の天井および坏部の底部を調整している。	上層。
31 7	① 高坏脚部。やや外湾気味に開き、端部は丸い。② 保存不良であるが、へう磨き。③ 天井部はナデマワシ、他は不明。	上層。
31 8	① 高坏脚部。上半部は若干外向し、下半部は大きく外向する。3孔を有する。② 斜ハケ後2段の縦へう磨き。③ 天井部はナデマワシ、上半にはしほり痕がみられる。下半は板ナデ。	上層。
31 9	① 器台。脚部上半は内湾気味に若干外向し、下半は内湾気味に大きく外向する。坏部は皿状で、端部は丸い。4孔を有する。② 坏部はナデ、脚部は斜へう磨き、接合部は棒状工具のナデ。③ 坏部は不明、脚部天井部はナデマワシ、上半にはしほり痕がみられる。下半は板ナデ。	上層。
31 10	① 器台。坏部は9に類似。脚部の上半下半の区別はできないで、外湾しながら大きく開く。② 坏部はへう磨き、端部は不明。脚部はへう磨きだが下半は不明。③ 天井部付近のしほり痕以外不明。	上層。
31 11	① 器台。小型高坏の可能性も強い。とくに脚との接合方法は、高坏と同じである。②、③ 不明。	上層。

AK11出土遺物

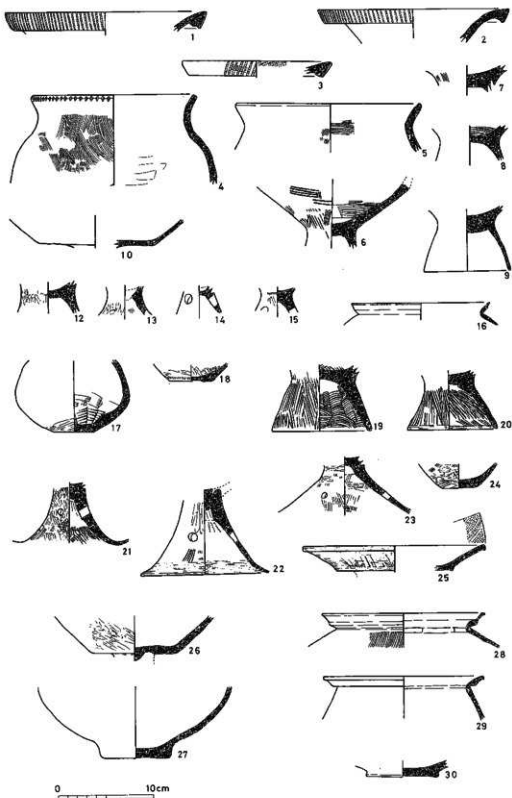
31 12・13	① 高坏。13は小型高坏であろう。②、③ 12の外函は斜へう磨き、他は不明。	中層。
31 14	① 高坏。比較的長い脚と思われる。接合部分が厚い。② 斜へう磨き。③ 天井部はナデマワシ、他は斜ハケ。	中層。
31 15	① 器台。小型高坏ともいえる。坏部下半に稜を持ち、屈曲して上外方に伸びるが器壁が薄くなる。脚部上半はやや内湾気味に外向し、下半は大きく外向する。3孔を有する。② 坏部下半は横へう磨き。脚部は2段の斜へう磨きだが、下半には斜ハケが残る。③ 坏部は不明。脚天井部は棒状工具のナデ、上半はシボリ、下半は斜ハケ後へう磨きだが、ハケがよく残る。	中層

AT7出土遺物

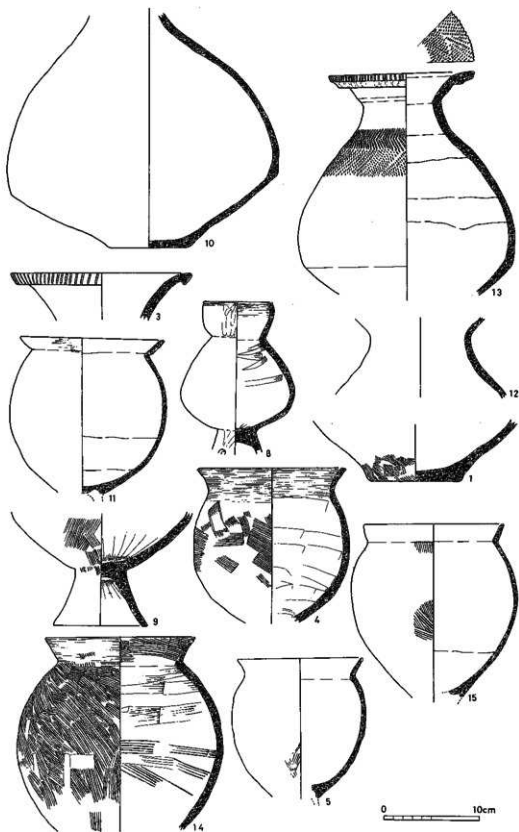
31 16	① 高坏。脚上半は内湾気味に外向し、下半は屈曲して大きく開く。②、③ 保存不良のため不明。	
31 17	① 高坏。上半は直線的に外向し、下半はやや外湾気味に大きく開く。接合部の突出したボタン状粘土塊がよくわかる。② 上半はナデ、下半は横ナデ。③ 天井部はナデ、上半はへう磨りのようにもみえる。下半はナデ。	

各地点出土々器拓本

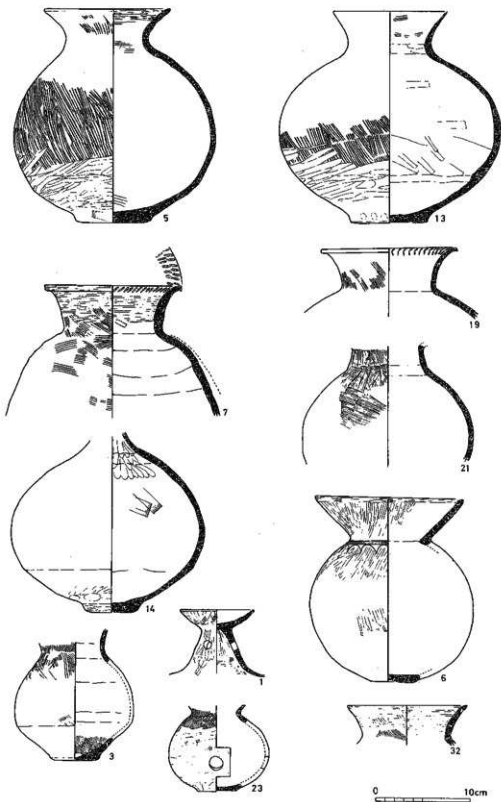
32 1~15	出土地点。1—A21包含層、2—A25包含層、3—AK3、4—AK5、6—9—AK6、10—12—AK10、13—15—AK11。 文様の特徴。1は羽状の擬縄文。2は上半擬縄文、下半縄文。3は壺口縁、内面に結節縄文4・7は、壺肩部隆帯上に棒状工具を押圧した刻み目。5・6・11・13—15は、結節縄文。9は櫛指平行横線文。8は幅のある口縁部に縦方向の細い棒状隆起。12は口縁内面のヘラ記号状の文様。
--------------------------	---



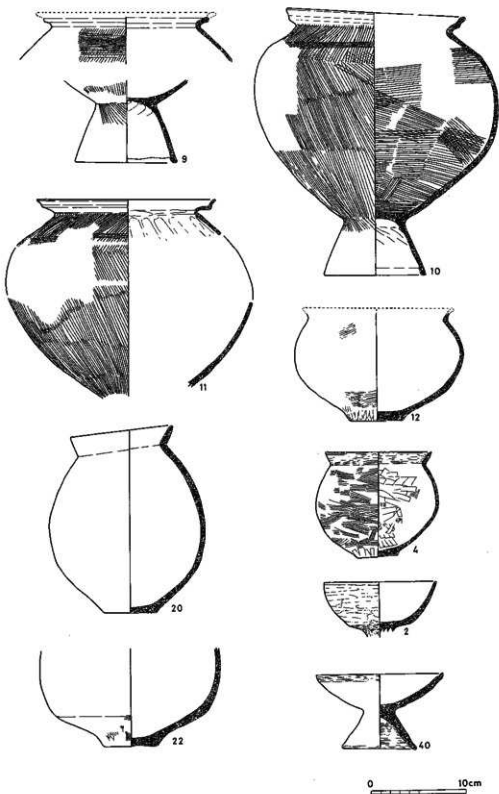
第23图 青木遺跡出土遺物 (AD 1・2・4, AK 3・5)



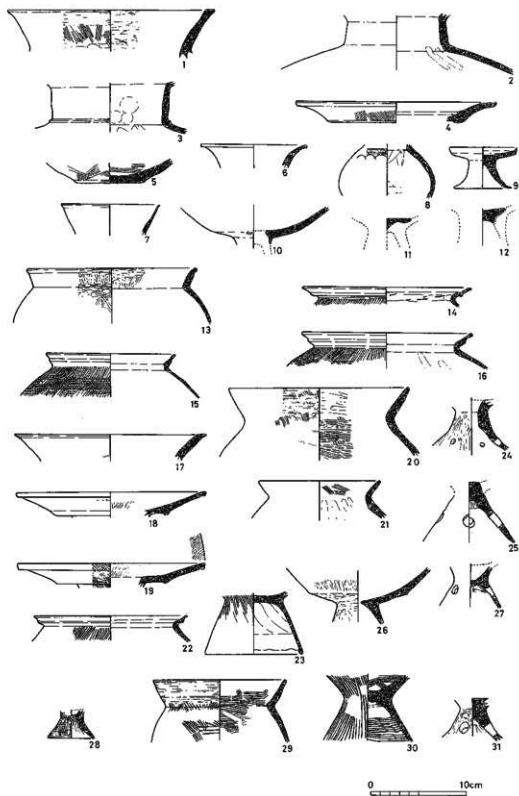
第24図 青木遺跡出土遺物 (AX1)



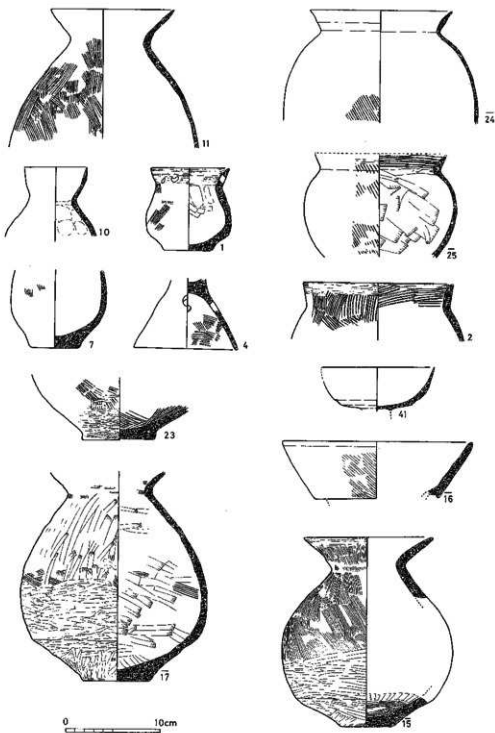
第25図 青木遺跡出土遺物 (AK 6)



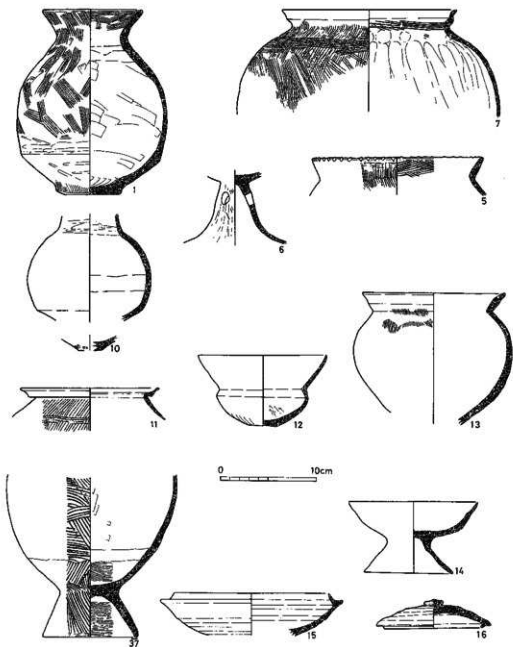
第26図 青木遺跡出土遺物 (AK 6)



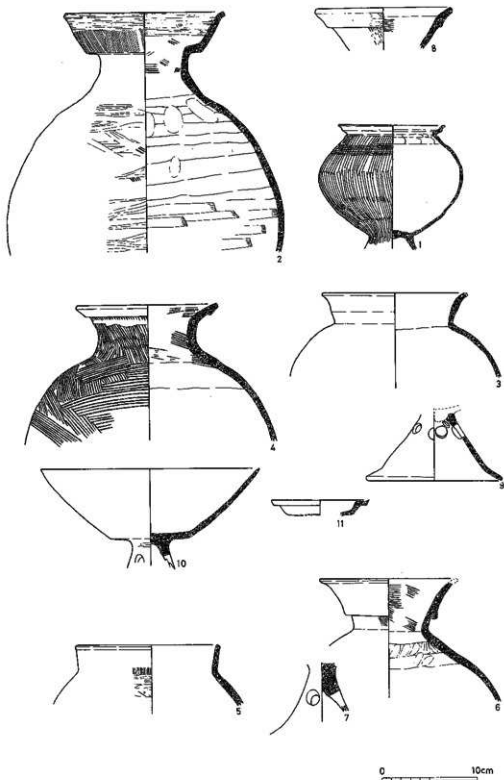
第27図 青木遺跡出土遺物 (AK 6)



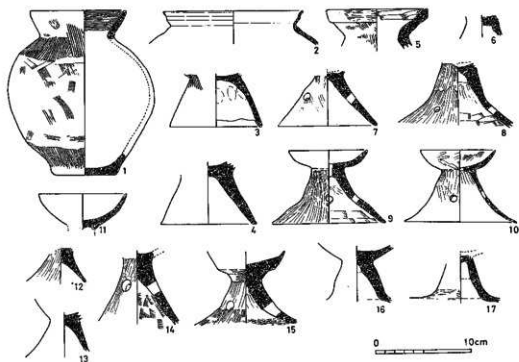
第28図 青木遺跡出土遺物 (AK7・A×2)



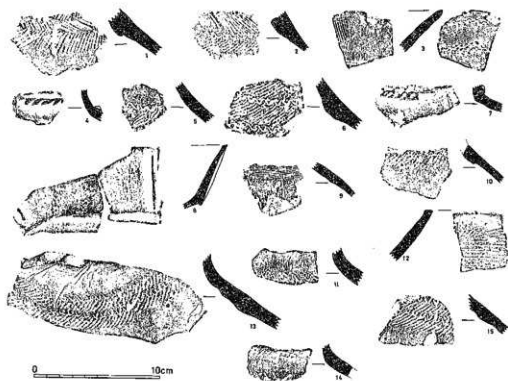
第20図 青木遺跡出土遺物 (AK4, AT1, AD3, AT3, 他)



第30図 青木遺跡出土遺物 (AK 8・9)



第31図 青木遺跡出土遺物 (AK10・11)



第32図 青木遺跡出土々器拓本

第4章 馬場第1・第2遺跡の概要

第2図にみるように、馬場第1・第2西立遺跡は、狭少な低地帯によって区別される小規模な微高地上に立地している。これらも、旧原野谷川の三角州の一部であることは、第1節で記す。また、各遺跡は通常概念で考えれば、同一遺跡の別地点とすべきかも知れないが、浅羽平野における古代末から中世の歴史を理解するためには、個々に1つの遺跡と考えた方がよいと思われる。このことは、第1章において記したが、これらの遺跡が、五保の制度から5人組の制度へと変化してきた村落の最少単位と考えた場合、近接し類似した3遺跡を1つの遺跡と考えるのもそれほど建設的とも思えない。

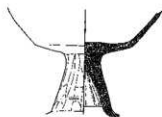
これらの3遺跡は、第3図の中畦堤の南側の遺跡であり、中畦堤の成立を、第1章において中世末と考えた前提に立てば、下輪村に含まれ、現在の梅山地区と深い関連を持つと考えなくてはならない。

第1節 D13地点（第34、35図）

当地点は、梅山字馬場970～973番地である。現在は、岡本秀司氏に換地されている。

梅山地区の水田床とは、主に粘土層であり、現在の集落が立地する砂堤以南では砂層である。しかし、当地点と周辺のごく一部に限って砂礫層がみられる。このため、当地点付近は石畑の俗称がある。

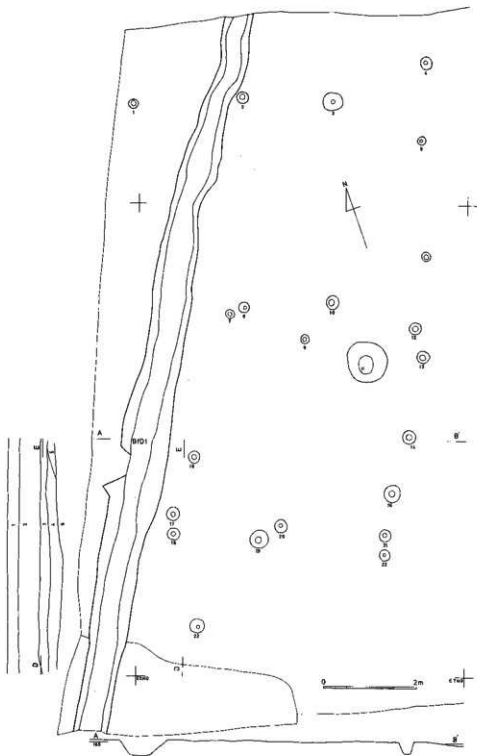
この礫層は、太田川水系に属する河川と同様の組成である（大場正八氏御教示による）と考えられるが、当地点を除いてはほとんど発見できない。1981年度調査において、表土下1～1.5mのボーリング調査を行ったが、この際に当地点を中心に、東西約40m、南北約50mの間に、ボーリングステッキを受け付けない堅い層があり、第7層とした。この層は、砂層ではないかと考えたが、今回の調査で砂層はごく一部で、大半は砂礫層であることがわかった。また、当地点から約400m東側で井戸掘り工事が行われたが、そのサンプルでは、地表下7～8mでこの礫層に達し、約2mの厚さをもっていることが確認できた。



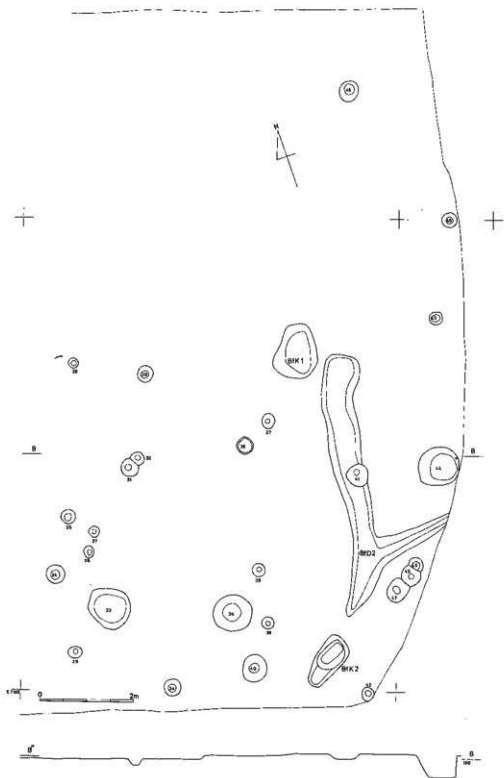
第33図 D13地点4層土土器 ($S = \frac{1}{4}$)

当礫層の追跡は、充分に行っていないが、西方7～800mの松原地内の水田下にも比較的浅い位置から礫層が発見されるらしい。また、当礫層下は、数十メートルにわたり、ウミナナ、ヘナタリ、ナミマガシワ、カキ、オキアサリなどを含む泥層となっていることと、梅山人頭龍大梅現社南側の砂堤で行ったボーリング調査（1982・静岡県）ではこの礫層は発見できないことが判明した。

以上のような点から、当礫層は古磐田海の一部として存在した浅羽町付近のラグーンが埋積



第34図 D13地点全体図 (No 1)



第35図 D13地点全体図 (No 2)

してゆく過程のなかにその成因をもとめることができる。

第34図D-Eセクションにおける6層が砂礫層であるが、上面には灰褐色の砂層が20~30cm堆積している。5層は、この砂層から礫層に至る暫移層である。4層の下部および5層上面からは、端部の摩耗がいちじるしい土師器が少量発見される。第33図はその一例であるが、5世紀後半から6世紀前半ごろのものであろう。

したがって、起伏の激しい礫層面がある程度平坦化するのもその時期といえよう。ただし、当地点の北から西側では礫層の上面には青灰色の粘土が堆積し、地表下1m以上の部分でも平安末ごろの遺物をごく少量含んでいる。また、東側には厚い褐色粘土が堆積し、B13地点の調査では、最上部から一点の占式土師器を採集している。南側では、D-Eセクションの延長となるが、礫層・砂層は急速に低下し、厚い粘土層の堆積をみせているが、その成立時期は不明確である。

いずれにしても、当地点は、北側に接して低地帯を持ち、東西方向にある程度のつながりのある微高地であったことがうかがえる。

3層の上面が各遺構の発見面であり、2層が各時期の遺物の含包層である。2層は、全体的には鎌倉時代以降の遺物を主としているが、古墳~平安時代の遺物もみられる。とくに、D-Eセクション付近では、層位的には確認できないが、2層下部の厚さ10cm程は、平安時代以降の遺物が含まれていない。

土坑2、溝状遺構2、ビット群が発見された。

1. ビット群

大別すると径80~100cmの大き目のビット(P11, 33, 36, 44)と、径50cm以下、多くは20~30cmのビットとに別けることができる。

これらのうち、時期の明確なものは少ないが、P11は古墳時代ごろの可能性がある。その他のビットは、P2, P17の出土遺物が示すように、12世紀後半以降の可能性が強い。

ビットは、合計49個発見された。これらの径と発見面からの深さは表10に示した。

ビット相互の関係は、つかみにくい。特に、東半分から発見されている例は、雑然としかみえない。しかし、P1~10, 12~22の合計21個は、ある程度の規則性がみられる。一応これらの

表10 第34図D-E 土層図層序

1	耕作土
2	茶褐色土（上半は江戸期の陶器が混り、下半は鎌倉以前の包含層だが、土質による区別はできない。）
3	褐色粘土質砂（2、3層の境が遺構発見面、西側の一部、特に南西側に堆積し、これに対応する他の部分は粘土になる。上面の遺物は奈良時代に限定されているが遺構は発見できない。）
4	灰褐色砂（南側に限定されて堆積している。北側のこれに対応する層は、灰色粘土。この層から5層にかけ摩耗した土師器を出土する。）
5	灰褐色砂礫（4から6層への暫移層）
6	灰褐色砂礫（調査区北西側から南東方向に最高位があり、凹凸が激しい。）

ビット群は、2棟以上の竪立柱建物遺構跡と考えたい。そして、P2、12がこれらの建物遺構と関連するとすれば、その時期は、おおむね鎌倉時代といえよう。

2. 土 坑

B f K 1

長径1.15m、短径0.95m、深さ0.15mの楕円形を呈し、内部から灰釉陶器などが出土しており、12世紀初頭以前と考えられる。性格は不明である。

B f K 2

長径1.2m、短径0.6m、深さ0.24mの不整形な土坑である。出土遺物は細片化した土師器と陶器である。

3. 溝状遺構

B f D 1

幅1.55m、深さ0.34m程度で、北東から南西に調査区を横断している。底面には、多少の凹凸が見られるが、北から南に向かって低下している。内部からは、ほぼ完形の山茶碗2点が発見されており、13～14世紀ごろに掘られた溝であろう。

B f D 2

長さ5.5m、幅0.7m、深さ0.09mの浅い溝で、途中からY字状に枝分かれする。いずれからも陶器、土師器の細片が発見されたが、時期を明確にすることはできない。

4. 出土遺物 (第38図)

出土遺物は、5～14世紀の土器・須恵器・陶器と、十数片の青磁器細片である。

22～25は、灰釉陶器の需用地での一括資料として興味深い、26、29は、12世紀代後半の資料であろう。27、28は、体部内面底部にかき上げ調整がみとめられ、E8地点3号井戸(E-3)との時間的前後関係が注目される。38の小皿にも同様のかき上げ調整がみられる。30、31は、7世紀前半代の須恵器、32～35は8世紀代の須恵器である。35の底部には、別個体(蓋)が腐着している。いずれも当地点の営まれた時期を知る資料であるが、伴う遺構を明確にできなかった点が残念である。

表11 各ビットの深さ (単位cm)

番号	深さ	10	28.5	20	22.0	30	13.0	40	19.5
1	20.5	11	50.0	21	13.0	31	16.5	41	35.5
2	21.0	12	14.0	22	13.5	32	13.0	42	27.5
3	18.0	13	25.5	23	28.0	33	9.0	43	8.0
4	30.5	14	24.5	24	16.0	34	17.5	44	47.0
5	12.0	15	30.5	25	19.0	35	5.0	45	21.5
6	8.0	16	22.5	26	9.0	36	34.5	46	30.0
7	11.0	17	16.0	27	9.0	37	21.0	47	21.5
8	20.5	18	17.0	28	11.0	38	23.0	48	22.0
9	15.5	19	22.0	29	13.5	39	8.5	49	16.5

第2節 E 8 地点 (第36図)

当地点は、梅山字馬場996番地である。現在は、浅羽義二氏に換地されている。

豊住地内から続く島畑の南端部となり、梅山地区の砂堤までは約200mである。この間は、砂堤後背部の低地となっている。

F11地点も当地点と同一の微向地であるが、これらとD13地点との間は、狭少な低地帯によって隔てられている。また、第3図の中畦堤は、当微高地の西端付近を北上しているものと考えられる。

遺構の発見面は、海拔1.5m前後であるが、海拔1.6m付近より下部は無遺物層となる点、用地北西端で発見された径0.5mほどの貝塚底面が海拔1.6mであった点などを勘案すれば、生活面は海拔1.6m以上にあったと考えられ、D-13地点とはほぼ同一高である。

ビット群、井戸状遺構3、溝状遺構3、小貝塚が発見された。

1. ビット群

合計63個のビットが発見された。いずれも径50cm以下で、20～30cmのものが多く、深さは表に示した。

D13地点と同様に、建物跡と断定できるものはないが、井戸周辺のビット群は、比較的直線的な配置がみられると共に、直交する配置もみられる。これらから建物跡を想定することは不可能ではないが、この場合には、Bs D1北側から1点だけ発見された円礫なども柱を想定する資料として考えなくてはならないであろう。

出土遺物は、いずれも細片のため時期を決めかねるが、13世紀から14世紀ごろであろう。

2. 井戸状遺構

Bs E 1

径約1.6m、深さ約1.2mで、灰色砂層内に底面を持つ。

底面から発見された陶器中第38図1、3は、重ね合わせて出上しており(図版17一上)使用中止時の祭祀と関係するものであろう。

木枠などの施設は発見されていない。

出土遺物は、陶器の他に曲物片、木片、種子、ひよ

表12 各ビットの深さ(単位cm)

番号	深さ	13	14.9	26	31.5	39	23.6	52	15.0
1	18.5	14	20.0	27	22.0	40	9.0	53	28.5
2	19.0	15	7.5	28	20.0	41	32.5	54	25.0
3	33.5	16	29.0	29	13.5	42	21.0	55	38.5
4	18.0	17	33.0	30	10.0	43	63.0	56	24.5
5	25.0	18	19.5	31	15.5	44	24.0	57	20.0
6	15.2	19	12.5	32	8.5	45	25.0	58	26.5
7	14.0	20	11.5	33	32.0	46	31.5	59	24.5
8	33.5	21	9.0	34	34.0	47	19.0	60	6.3
9	14.0	22	16.5	35	15.0	48	10.0	61	17.0
10	28.5	23	11.5	36	8.5	49	11.5	62	32.0
11	13.0	24	24.5	37	18.5	50	8.5	63	8.5
12	13.5	25	38.5	38	12.0	51	15.0		

うたん片などがあり、12世紀末葉ごろに使用を中止したと考えられる。

Bs E 2

径約1.5m、深さ約1mで灰色砂層内に底面を持つ、Bs E 1の上層が、埋められたとも思われる層序であるのに対し、自然堆積の状況を示している。6層は、マシジミを主体とした混土貝層である。

木枠などの施設は発見されていない。

底面からは、破損した後に硯として使用されたいわゆる転用硯(第38図7)と、馬骨(頭骨)が出土している。また、曲物片、種子、ひょうたん片なども出土しており、12世紀末葉ごろに使用を中止したものと考えられる。

Bs E 3

径約1m、深さ約0.9mで、前者よりやや小型である。しかし、壁の立ちあがりが急な点を考慮に入れると、使用時に近い形と考えられる。

堆積状況は、埋めた状態をよく示していた。

底面から陶器碗と小皿が出土した(第38図5、8)が、投棄されたと考ええるよりは、祭祀と考えたい出土状況である(図版18下)。

陶器以外の遺物は発見できなかった。

3. 溝状遺構

Bs D 1

幅1~1.3m、深さ0.2~0.4mで調査区を東西に横断し、Bs D 2とはほぼ併行し、Bs D 3とは直交する。

堆積土は、若干有機物が混入している程度で見分けが困難であった。また、遺物はほとんど出土しない。

Bs D 2

Bs D 1と同一規模を持ち、相互に関連しているものと考えたい。関連しているとすれば、両者の距離は、内法で2.3~2.5mである。

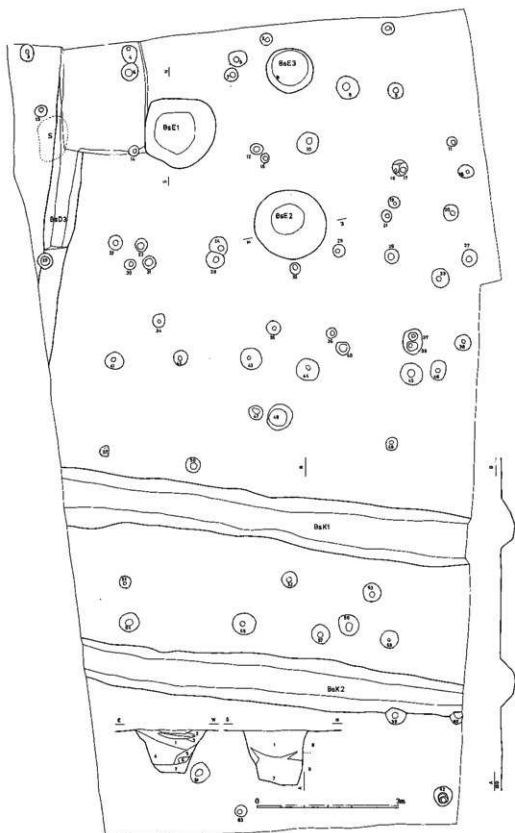
Bs D 3

調査区北西隅に発見された。堆積土が、無遺物層と類似していたため、発見が遅れたが、前2者とはほぼ90°の角度をもっている。

溝内からは遺物は出土していない。

表13 第38図E-W、S-N断面図層序

1	暗茶褐色粘土(若干の炭化物を含み、遺物は少ない。)
2	暗褐色粘土に黄褐色粘土ブロックが混る
3	暗褐色土(灰を多く含む)
4	1と同じ
5	暗灰色粘土(有機質が強く、7と比較して、ブロック状の粘土が多い。)
6	混土貝層(マシジミが主体)
7	暗灰色粘土(遺物を多く含む)
8	黄褐色粘土(無遺物)
9	灰色砂(無遺物)



第36图 E 8 地点全体图

小貝塚は、この遺構が完全に埋積した後に形成されている。P29も同様である。

3者が同じ遺構を構成するものであると考えれば、ビット群に先行する可能性が高い。

4. 小貝塚

調査区北西端に発見されたマシジミを主体とした小貝塚である。

貝層直下からは第38図6が出土しており、井戸跡などよりは新しいと考えられる。

5. 出土遺物

第38図1～11が当地点出土タ器である。1～4はBs E1底面、5、8はBs E3底面、7は、Bs E2底面、6は、小貝塚直下、9、10は包含層出土である。

いずれもいわゆる山茶碗の時期の例であるが、古い段階に属するものはみられず、すべて12世紀末以降と考えられる。

Bf K1発見の陶器などは、いわゆる灰釉陶器の時期のものであり、大須賀町清ヶ谷窯跡群の製品として理解できるが、当窯跡群では、13世紀以降は當窯していない。清ヶ谷窯跡群の下限は、下っても38—26、29などで12世紀後半代とみなくてはならないため、当地点出土の陶器類は、別の供先を考えなくてはならない。

これらについては十分に検討できないが、38—1～4など、灰釉を施し、しかも輪花碗であるとはいえ、高台部に稷穀痕を持つ例があるなど、決して古くばかりは考えられない。実年代を知ることはできないが、12世紀末葉以前にはならないであろう。

当地点およびD13地点の山茶碗を大略的にとらえれば、

Bf ビット群伴出→Bs E1伴出→Bs E3伴出→Bf D1伴出の遺物と考えることができよう。また、Bf K1の灰釉陶器とは、連続的にたどりうるものであろう。

Bf D1に伴出した山碗は、14世紀代に下ると考えているが、根拠はない。

尚、当地点からは青磁片は発見されていない。

第3節 F11地点 (第37図)

調査経過において記したように、E8地点と共に、松原工区分として調査している。

一連の島畑の西端に当り、北西側には第3図の赤堀池に通ずる広大な湿地帯がある。また、中畦堤は、この付近ないしは若干西側を通過していたと考えられる。

E8地点と同一の微高地を形成しているが、粘土層下にみられる砂層は、GHセクションにおいてもみとめられず、基層はE8地点より低いと考えられる。

遺構の発見面は、海拔160~170cmにあり、E8地点とはほぼ同一か若干高い位置である。

ビット群、掘立柱建物遺構1、溝状遺構3、その他が発見された。

1. ビット群

P1~16は、掘立柱建物遺構として確実なため後に記すが、他に7個のビットが発見された。

P17から19は、芯々距離約2.1mの等間隔に並んでおり、東側につづく建物跡と考えられる。

P20から23は不明である。

2. 掘立柱建物遺構

Bs B1

P1~16の柱穴からなる建物跡である。

西側は用地外となるが、間口3間、奥行3間の建物跡と考えてよいであろう。

各柱穴の芯々距離を192cmとして方眼を組むと、すべての柱穴が問題なく並ぶため、柱間は、芯々で192cmと考えることができる。

P6、7、10、11は、柱列の中央になるが、径が50cm以上あり他の12本より大きい。P

4からは柱根、P11からは礎板風の木片、P5からは、太さ4cmほどになった柱根の残欠が発見された。P4発見の柱痕は、径約16cmで、3方に枝が伸びているが、この部分は鋸で切断されている。

Bs D6は、当建物遺構に関連するとも考えられる。また、P9と13との間に焼土の分布がみられたが、発見面は、柱穴発見面と同じである。

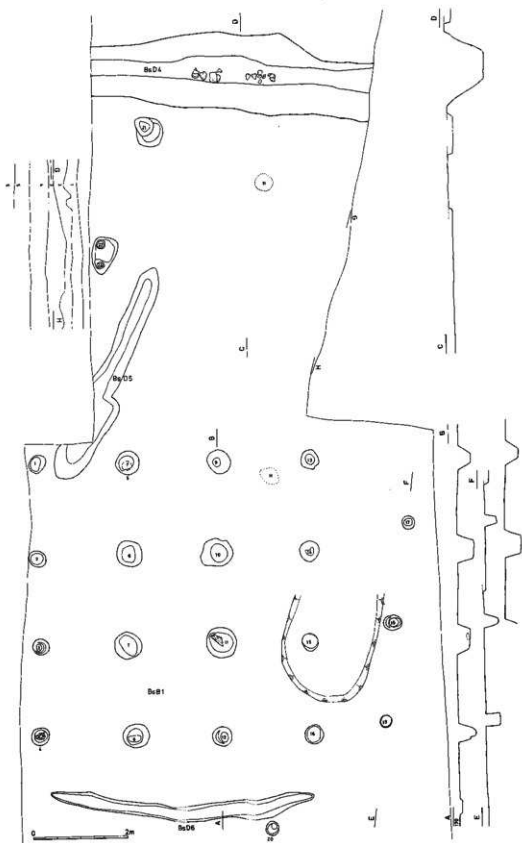
出土遺物は多くないが、P7からは青磁

表14 各ビットの深さ (単位cm)

番号	深さ	6	29	12	37	18	30
1	33	7	39	13	24	19	30
2	25	8	33	14	26	20	33
3	34	9	26	15	38	21	28
4	38	10	33	16	44	22	18
5	33	11	27	17	25	23	16

表15 第37図 G-H 断面図層序

1	耕作土
2	淡茶褐色粘土 (盛土層か)
3	暗褐色粘土
4	淡褐色粘土 (上部には少量の土器を含む)
5	黄灰色粘土 (無遺物)
6	灰色粘土 (無遺物)



第37图 F11地点全体图

小片が出土している。また、P 5 内出土の陶器 (38—17) は、図版13—下でみるように、柱穴内埋土中出土であり、当遺構の上限を知る資料であろう。12世紀中葉以降の陶器であろう。

3. 溝状遺構

Bs D 4

幅1.1～1.6m、深さ45～70cmで、調査区北端に発見された。

堆積土は、明るい暗褐色土で比較的多くの遺物を含む。床面から約10cm上部に礫が集中する部分がある。いずれの礫も焼けている。また、割れているが接合できない。

出土遺物には、須恵器・陶器・土師器がある (38—11～16)。多くは奈良時代に属するが、11、12は、壁に接して数ヵ所から発見され、その発見状況は混入とはいえないため、溝の時期は12世紀ごろと考えた。

Bs D 5

幅50～70cm、深さ15～23cm、長さ約490cmで、南側が急にふくらむ。土坑と溝との重複とも考えられるが、一連の溝と考えた。

出土遺物はすべて細片であり、時期は不明である。

Bs D 6

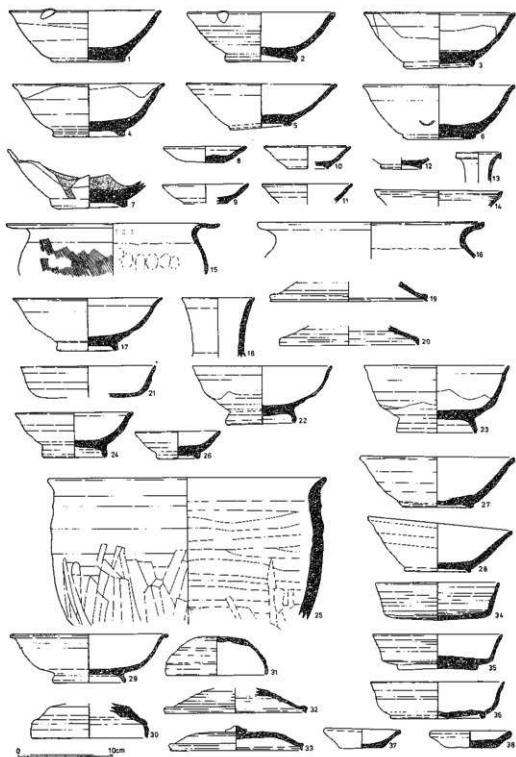
幅35cm、深さ約6cm、長さ約560cmで、細く浅い。建物遺構の側へ弓状に湾曲している。

出土遺物はすべて細片であり、時期は不明であるが、建物遺構に伴う可能性も考えたい。

4. 出土遺物

第38図11～21が当地点の出土遺物である。11～16はBs D 4、17はBs B 1、18～21は包含層出土であり、15、16、21は土師器である。

発見した遺物をみた限りでは、奈良時代に属する例が多い。近くに奈良時代の遺構を考えることができよう。また、平安時代の遺物は含まれていない。



第33図 馬場第1・第2遺跡出土遺物

第5章 ま と め

当遺跡群の調査は、中・東遠地方の海岸平野の遺跡としては久しぶりに行われたものである。むしろ浅羽平野ではじめての科学的調査である。

この調査が浅羽平野に対する地域住民の理解を根本から変えたことはいうまでもない。浅羽町民にとっては、今回調査された各遺跡から数千年の昔から海でなかったことを理解でき、先人が居住していたということを知っただけでも驚異だったのである。

さて、当調査が有形無形に郷土研究に果たした役割は大きいが、考古学的考察を加えてゆくには尚早ともいえる。遺跡個別には、相当の成果は得ているが、周辺部の調査があまりにも遅れているためである。当調査を行っている間に発見されたり知ることとなった遺跡は少なくない。つい近年まで遺跡の存在を知られていなかった福田町には、現在少くとも塩口、島、一色知泉庵の三遺跡を古墳時代に考えなくてはならない。また、梅山遺跡群以外に、松原権現山、宮ノ腰などの遺跡が発見され、第2砂堤列以南の遺跡群の存在も考えなくてはならなくなった。さらに、遺跡の存在を予測していなかった西浅羽地区の一色釜下遺跡も発見され、原野谷川自然堤坊上に別の遺跡群を考慮に入れなくてはならなくなった。

浅羽平野において、遺跡の発見されていないのは、幸浦地区だけとなったが、地図上でみるかぎりでは、福田町一色知泉庵遺跡と同当の砂堤列上にあり早晩のうちに発見されることも予測しなくてはならないであろう。

このような状況下にあるため、多くを考察することは不可能であるが、当調査における考古学的成果として、東遠地方の古式土師器研究にある程度の目案ができた点をあげることができる。

したがって、この点に関してのみ若干の整理を行いたい。

尚、本文中でも度々指摘しているが、あくまでも当遺跡における具体的整理であって、決してそれが東遠地方全域で指摘できるとは主張していない。また、資料的不足から予測される形式の欠落が考えられることもあり、その組別化は行わないで、単に一括資料の段階区分を行ったに過ぎない。したがって、当稿は、今後の古式土師器研究に対する私的な指針として位置付けたい。

青木遺跡の古式土師器について

当遺跡の古式土師器は、1981年度調査報告にも掲載し、ある程度の段階に分かれるのではないかと考えた。また、S字襷に関しても組別化が可能ではないかと思われた。しかし、これらは、資料的にあまりにも不十分であり、そこでの段階を設定するには至らなかったが、予期された土師器編年の問題点を整理することができた。

今回の調査は、当初からこの問題点をふまえて行っているため、その成果を記し、1981年度

報告の誤謬などの訂正を行う。

しかし、AK6・AX1などで比較的良好な資料は得たが、集落の景観が復元できない点、資料が検証しきれないなど不十分な点が多い。特に、各段階を設定してみたものの、単器種でしか表現できないものもあり、各段階の組成、形式の組列など後々の課題は多い。したがって、ここにおいては、S字甕の細分を中心として古式土師器の編年を予察することとしたい。

(単純口縁甕の変化) AK3・4・6・7・AX2などから出土している。これらは、26-20とは違って、東遠地方の弥生土器から系譜をたどることも可能である。AK6出土土器には、この他にも26-12、19、3など菊川式にその系譜が求められるものもあるが、これらは当道跡におけるその前段階が不明である。

AK6とAK7には、造構の新旧関係があり、AK7の方が古い。この両者から出土している単純口縁の壺(25-5・13、28-11、17)を比較すると明らかな相異がみられる。AK7の例は、胴部下半に稜を残し、下ぶくれの器形をしているのに対し、AK6の例は、球形あるいは扁球形の胴部になる。しかし、土器の調整方法は類似している。これを、壺の球形胴化の傾向でとらえれば、造構の切り合い関係と矛盾しない。

したがって、単純口縁甕の球形胴化の完成は、AK6の段階とというる。

(脚付甕の変化) S字甕ではない脚付甕を単に脚付甕と呼ぶが、意外に例が少ない。

AX1出土資料中には6点ある。これらは、大きく別ければ、胴部が球形になるもの、最大径が胴部上半にあって長胴になるもの、最大径が中位以下にあって肩の張らないものの3類に別けうる。後2者は、菊川式にもみられる器形であるが、球形胴の脚付甕は、菊川式には多くはみられないものである。確認できるものは、いずれも胴部斜ハケ、口縁部横ナデ調整であり、口縁部には刻じをもたない。

当道跡においては、これらの脚付甕は、S字甕の増加に反比例するかのように急速に量が減少するようである。

(高坏の変化) 大型高坏は、AK3では比較的多く発見できるが、AK6では確認できるものは少ない。また、AK8に1例みとめられる。脚部下半が大きく開くと思われる例は、AK6には多い。AK3、AK7では脚の開かない例もある。高坏は、量的には多いが、細分して検討できる状況にはない。

(その他の土器の変化) 小型器台は、AK6、AK10、AK11などから発見されているが形式の組列は不明である。これは、AK3からは発見されていないが、小型精製の鉢が一例発見されており小型精製土器は出現している。また、25-6、24-8、28-10、27-8などは、胎土、焼成は他の例と大差ないが、搬入品の可能性が高い。

(S字甕の分類) おおづかみに各器種の概要をみたが、単純口縁甕にみられるように、当道跡の土師器には明らかに段階があるといえる。そこで、S字甕について検討する。

AK6の一括資料中には、3点のS字甕が含まれている。これらの内、26-10は、胴部内面

全体にハケ調整痕がみられる。このような例は、当遺跡全体をみても類例はなく、脚付甕にもみられない。S字竪内面調整のバラエティーと考えているが、その位置付けは困難である。したがって、この点は除外して考える。

AK6からは、頸部内面の調整痕がみられる例が、上層から7点、中層から5点発見された。これらのうち、頸部内面にハケ調整痕を持つものは小破片で1例、ごくわずかにその痕跡がみられるものが1例(27-14)発見されているが、それ以外は、ヘラ削りあるいはヘラ削り後横ナデ調整を行っている。また、先のハケ調整痕を持つ例は、いずれも上層遺物である。したがって、AK6出土のS字竪は、ハケ調整痕を持たない例が圧倒的多数である。これに対して、AK3ではその逆で、ハケ調整痕を持つものが多い。

S字竪における頸部内面のハケ調整痕の有無は、Ⅱ類とⅢ類を別けるメルクマールの1つとされているが、当遺跡^(注2)においても遺構によって変化のあることはみとめられる。

表16 青木遺跡出土のS字竪分類の基準

類別	類別の箇所	類 別 の 基 準
1	頸部内面	ハケ調整痕が残るもの。ハケ調整後ヘラ削り、ナデ等ではほとんど消され痕跡程度の例は2類に含める。
2	"	ヘラ削り、ヘラ削り後横ナデあるいはナデを行うもの。
A	頸部外面 くびれ部	横ナデあるいはナデを行うもの。画者を行わず斜ハケが残るもの。棒状工具を用いた例もあるが、頸部に食指がはいる程度の湾曲を持っている。
B	"	棒状工具によるナデあるいは回転ナデを行うもの。あるいは、斜ハケの原体を強く押しつけたもの。頸部に食指がはまらない程度湾曲するもの。
a	口縁部	口縁上半部と下半部との境の段が内外面とも緩味なもの。
b	"	口縁上半部と下半部との境の段がはっきりしたもの。
c	"	口縁上半部に比較して下半部が肉厚で、内面の段がほとんどみられないもの。
イ	口縁端部	端部を内面から尖らせるもの、あるいは下内向する面を持つもの。
ロ	"	端部を丸くおさめるもの。外方に若干肥厚するものも含める。
ハ	"	端部に甘い平坦面を持つか、下外向する甘い面を持つもの。平坦部には浅い沈線を持つことが多い。

口縁部および縁端部の形態にも若干の違いがみられる。これらの類別の基準は表にまとめた。胴部にも違いはみられるが、今回は省略した。

AK6一括資料中の、26-10は、頸部内面にはハケ調整痕を持たず(2類)、頸部から口縁部へと比較的ゆるやかに外向し(A類)、口縁上半と下半との境に大きな段をもたない(a類)。また、口縁端部は丸くおさめられている(口類)。これに対して、26-11は、2Bb口類となる。A・B類の区別は、器形的にもいえるが、A類は、頸部外面くびれ部は横ナデ調整が主であり、B類は、棒状工具によるナデないしは回転ナデである。

AK3の資料中には、1Aa口、1Abイなどがみられるが、1Abイが圧倒的に多い。なお、1981年度報告の10-6・8は頸部内面が摩耗して調整痕不明である。

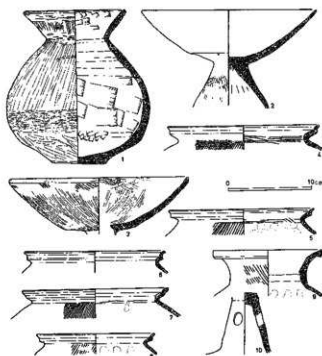
AK6上層(27-16)、AD2(23-28)の遺物は、前記の例とは若干異っている。27-16は、2ACハであり23-28は、2Baハである。

従来から、1類は2類より古い要素としてとらえられ、イロハ類も同様にみられていた。したがって、当遺跡においては、これらからS字装が3段階に分けうることになるが、仮にそれを前提とした場合には、B類は、当遺跡の古い段階には存在しないことになる。しかし、それにも増して、同一遺跡内であっても、1Aa口→2Aa口→2ACハという系譜、1Abイ→2Bb口→2Baハの系譜など異った系譜の存在がみとめられることに注目したい。

遺構の新旧関係を利用して、当遺跡のS字装を3段階に分けた場合、当初から2つの系譜がある。また、すでに明確な在地化がみられるわけであるから、さらに古いS字装の存在を予測しなくてはならない。したがって、当遺跡におけるS字装を中心とした段階設定は、S字装以降も考慮に入れて、第1～第5段階を考えたい。

表17 AK3出土S字装の分類

類別	数量	類別	数量
1Aa口	1	2Bbイ	2
1Abイ	5	2Baハ	1
?Abイ	4	??a口	2



付図1 AK3出土遺物(注1 文献第10図)

S字装の各段階の時間差を指摘できる資料は少ない。

AT1は、AK3、AK4よりは新しいことが造構の切り合いから確認できる。AT1のS字装は、2Bb口類であり先に設定した第3段階であるが、AK3からは主として1Abイ類が出土し、AK4からは1Aa口類が出土している。また、AK4出土の単純口縁壺は、AK7の例に類似しており、AK7はAT6より古いことが確実である。したがってAK7からはS字装は出土していないが、AK6一括のS字装はAK3のS字装より新しいといえよう。

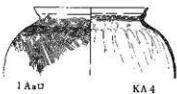
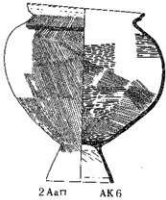
以上の2例から第2段階は、第3段階より古いことが確認できた。第3段階と第4段階については、時間的な前後関係を確認できないが、第3段階よりは新しいと考えたい。

(各段階の概要)

S字装については、以上のような分類を行ってみたが、これらから得られた各段階の概要とその造構は次のようである。

(第1段階) AX1一括を代表的な例と考えている。不確実な資料であるが、AD1中層資料もこの段階に含めて考えられる。壺・脚付甕など菊川式の系譜でとらえることができる。A

表18 青木遺跡古式土師器の各段階

段階	主体的なS字装	主な資料
I	不明	AX1一括 (AD1)
II	 	AK3 AK4中層 (AK7)
III	 	AK6一括 (AK5) (AK8) (AT1) AK10上層
IV	 	(AK6上層) AD2
V	不明	AT7

X 1一括は、組成に不足があり、AD 1を補充資料として用いるが、元屋敷・石塚期の大型高坏(23-10)、菊川式系の高坏(23-12)の混在が考えられる。脚付甕は、全器種の30%程度が考えられる。S字甕は確認できないが、23-9は、脚端部の内面への折り返しはみられないが、とり付け部の手法はS字甕に類似している。ひさご形脚付壺(24-8)がみられる。

(第2段階) AK 3・4・7を考えているが、どの遺構で代表すべきか疑問点が多い。…応3者を等質に考える。

折り返し口縁、有文の壺が目立って減少する。脚付甕は減少しないが、S字甕が増加する。S字甕は、1A bイ類が多く、1A aロ類などもある。しかし、2類は少ない。大型高坏の端部は丸くおさめられている。28-10のように、ひさご壺もみられる。28-41は、胎土に砂粒を多く含んでおり、在地の土器でない可能性がある。28-11、17、15など、単純口縁で、胴下部にわずかな稜を持つ壺が目立つ。小型精製土器は出現しているようである。

(第3段階) AK 6一括で代表されるが、AK 5・8・9・10・11、AT 1なども含めて考えられる。ただし、これらの内、第4段階が明確になれば、その段階に含めるべきものが混入していることは考えられる。壺の球形胴化が目立つ。脚付甕は減少し、総数の10%以下となる。S字甕は目立って増加しないが、2B bロ類が目立ち、2A aロ類もある。その他に、2B aロ類も考えられる。しかし、1類はほとんどみられない。大型高坏・脚付甕は、減少する。また、小型精製土器群が確実にみられる。26-20にみられるような壺は、この段階に出現すると考えられる。

(第4段階) 組成がわからない。AK 6上層のS字甕(27-16)などは第4段階であるが、上層遺物(27-1~16)すべてを第4段階と考えることはできない。また、その多くを第4段階と考えれば、第3段階と変化はないことになる。

(第5段階) AT 7の高坏2点以外は不明である。第5段階をこの高坏に代表させれば、第4段階との間には空白がある。

(各段階の他遺跡との併行関係)

天竜川以西の遠江地方(西遠)の古式土師器は、近年資料数が増加し、編年研究も進展している。^(注3)しかし、天竜川以東の遠江地方(東遠)においては、あまり進展がみられない。

それらのなかで、御殿・二之宮遺跡、野添遺跡において古式土師器の問題を整理した中嶋氏の功績は大きい。中嶋は、御殿・二之宮遺跡NX 1およびOK 171の上下層遺物に注目している。ここでは、下層遺物は菊川式の新しい段階ともいうべきものであり、上層遺物は小型精製土器を伴う土師器である。この下層から上層への変遷は、大きなギャップを持つものであり弥生土器から土師器への変化は唐突ともいえる。この時点で編年表を作成すれば(+)をその間に作らざるを得ないであろう。しかし、その後の調査研究を含めてもこの空白を埋める資料が発見できなかったのも事実であるばかりか、野添遺跡SK 199、新豊院山3号墓、城崎遺跡、^(注4)徳光遺跡IV層、当青木遺跡AK 6などNX 1上層に対比できる資料が目立ち、他方、西村原遺^(注5)^(注6)^(注7)

ある。このような例は、類例が少ないため検討できないが、西遼における梧野遺跡のS字甕のように、いわゆるⅢ類でも古いと考えられそうなのと併行すると考えてさしつかえないように思われる。仮に、これが正しいとすれば、第2段階もまた元屋敷・石塚期の中段階とみてよいであろう。

したがって、当遺跡の第2・第3段階は、元屋敷・石塚期の中段階に併行すると考えられよう。このように考えると、ひさご形壺も東遼においては伊勢湾地方よりは多少新しい段階まで残存するといえよう。

当遺跡の第1段階は、AX1一括だけとりあげれば、菊川式の新しい段階にみられてもよい要素である。そして、24-8が欠山式であるとすれば、まさに菊川式である。したがって、菊川式に含めて考えることもありうる。しかし、AD1中層遺物を参考にすると、やはり古式土師器としてとらえなくてはならない要素が加わってくる。いずれにせよ、東遼の弥生土器から七師器への変遷を考える場合、小型精製土器群を伴う土師器より古い土師器が、少なくとも1段階は設定しうることになる。これを元屋敷・石塚期の古い段階に併行させるとすれば、それも可能であろう。しかし、この点は、^(註22) 神門4号墳、^(註23) 弘法山古墳など、元屋敷式と呼ばれる確実な資料と伴出する遺跡・遺構の発見を待ちながら、段階の組成、形式の組列、分布地域の限定など、土器編年の基礎作業を行った後に論考したいものである。

第4・第5段階については、今回の調査結果からは検討できない部分が多いため、別の機会に考えたい。

さて、いわゆるS字甕Ⅱ類のもっと明確な特徴といえる頸部内面のハケ調整痕を持つ当遺跡の1類は、その一点においてはⅡ類と考えるわけである。1981年度報告において、Ⅱ類と呼んだのもそのような理由からである。しかし、先にも指摘したように、1類の中にもⅢ類的要素はみられるし、26-10のように、古いと考えられる要素を持つ例もある。これらは、S字甕を細分しても、それが単一で1つの段階を構成するものでもなく、凡日本的に共通の特徴とみるべきものでもないことを示している。その初源が一元的であるにせよ、それらは在地での発展があったと考えるのである。しかし、足立・木下氏などが古い要素としたものはやはり古く、新しい要素としたものは新しいという点は、当遺跡においてもある程度確認はできた。

当遺跡でみられたS字甕の変化を東国でみると、田口氏のⅡ期からⅣ期に対応するといえよう。^(註24)したがって、この見解にしたがえば当遺跡の第2段階は、元屋敷(古)と併行することになり、先の指摘とは大きな違いをみせることになる。

これらについては、今後の課題としたい。

注

- 注1 「青木・馬場第1・西立遺跡」 柴田 稔 浅羽町教委 1982
- 注2 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号 安達厚三・木下正史 日本考古学会 1974
- 注3 「遼江における古墳出現前夜の集団関係」『静岡県考古学研究9』佐藤由紀男 静考会 1980
- 注4 「御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ」 中嶋郁夫他 磐田市教委 1981
- 注5 「野原遺跡発掘調査概報」 中嶋郁夫 磐田市教委 1982
- 注6 「新豊院山墳墓群」 柴田 稔他 磐田市教委 1982
- 注7 「城之崎遺跡発掘調査報告」 辰巳和弘 磐田市教委 1978
- 注8 「袋井市徳光遺跡発掘調査概報」 大谷純仁他 1968 日本道路公団 静岡県教委
- 注9 「中遠地区の弥生後期の土器」 柴田 稔 「弥生後期の集団関係」 静岡県考古学会シンポジウム5 1983 静考会
- 注10 「加茂東原遺跡第1次発掘調査概報」 栗野克己 豊田町教委 1982 尚第2次調査概報は、1984年に刊行が予定され、当該資料の実測図を掲載する予定である。
- 注11 注6文献
- 注12 「弥生土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』47号 大参義一 名古屋大学 1968
- 注13 「月の輪遺跡群」 加納俊介他 富士宮市教委 1981
- 注14 「袋井市史」第2編第4章 足立順司 袋井市 1983
- 注15 注3文献
- 注16 「新編一宮市史」資料編2 澄田正一他 一宮市 1967
- 注17 「おばたけ遺跡発掘調査報告」 下村登良男他 鳥羽市教委 1978
- 注18 「朝日遺跡群第1次調査報告書」 七原恵史他 愛知県教委 1975
- 注19 注21文献 S D24については鈴木敏則氏の御教示による
- 注20 「川久保遺跡ほか、発掘調査概報」 栗原雅也他 1982 細江町教委
- 注21 注19文献、および「椿野遺跡」 鈴木敏則他 浜松市教委 1982
- 注22 「市原市神戸4号墳の出現とその系譜」『古代』63 田中新史 1977
- 注23 「弘法山古墳発掘調査報告書」 大塚初重他 1978 松本市教委
- 注24 「元島名将軍塚古墳」 田口一郎 高崎市教委 1981

お わ り に

取急ぎ記した気配がないわけではないが、どうにか報告書の刊行にまで漕ぎ着けた。

静岡県考古学会では、1981年度に弥生時代後期のシンポジウムを行い、1982年度には土師器のシンポジウムを行った。これは、県内研究者のなかで、弥生時代・古墳時代の再検討をしようとする気運が高まっていることを意味している。そのような中で、弥生から古墳という変化は、単に大型前方後円墳の出現ということにとどまらず、政治・社会構成の研究、土器編年の再検討等々多くの問題点が指摘された。

1981年から82年には、磐田市新豊院山1・2号墳、3号墓が調査され、その築造時期など多くの問題が提起された。

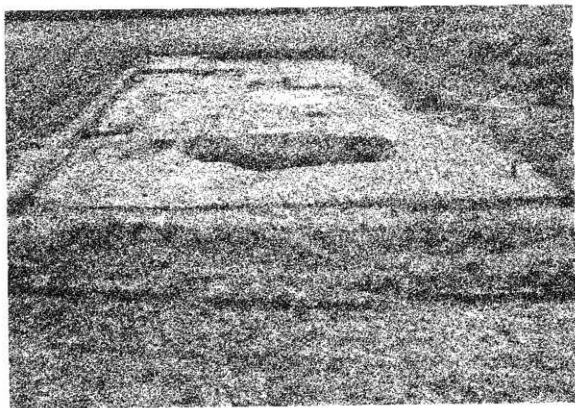
これら一連の動行のなかで、当遺跡の調査は、かなりの比重を占めるものであろう。

新豊院山古墳の調査以来、偶然にも弥生から古墳時代にかけての2つの遺跡を連続して調査することになった。豊田町加茂東原遺跡もこの青木遺跡も、個々の遺跡としては十分に把握できるものではないが、いずれも土器編年のうえで良好な一括資料を得ることができた。これで、少くとも新豊院山古墳の土器は、東遠地方の土師器編年のどの位置に付くかは理解できそうである。

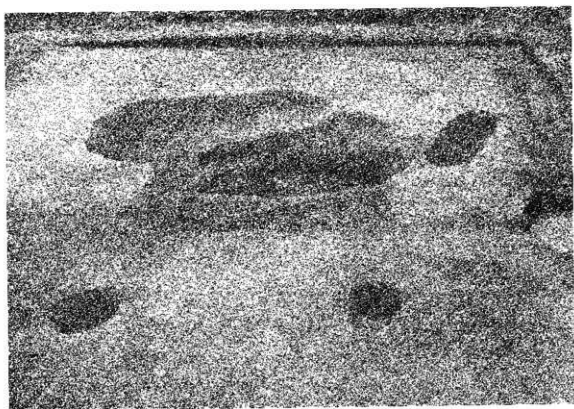
浅羽平野の遺跡は、自分の居住地でありながら自分自身のなかでの整理は遅れていた。しかし、今回の調査と整理のなかで、おぼろげながらその全体像が掴めてきた。この点は、すでに第5章に記したが、今、中遠地方で遺跡群全体を眺めながら検討できる場所も少なくなっている。今後は、これを生かして、より鮮明な歴史を編んでゆきたいものである。

最後に、本書を作成するに当り、多方面からの心配りをいただき、無事完了したことに対し、鈴木豊教育長をはじめ、教育委員会事務局の諸氏に感謝の意を表したい。(柴田稔)

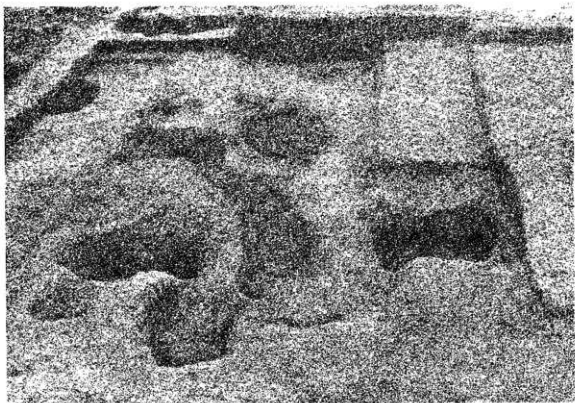
圖 版



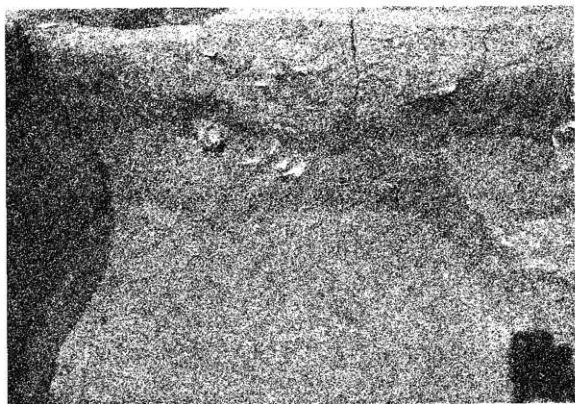
1 A21地点完掘状況（西側より）



2 AK1-2完掘状況（東側より）



1 AD1完掘状況（西側より）



2 AD1埋積状況



1 A25地点完掘状況（東側より）



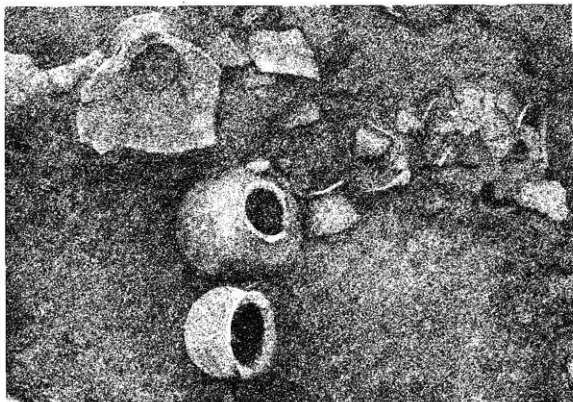
2 A25地点西壁断面



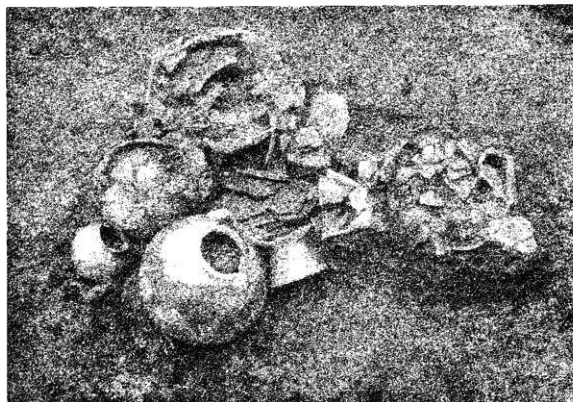
1 AK5・6・7, AD2・3・5発見状況(東側より)



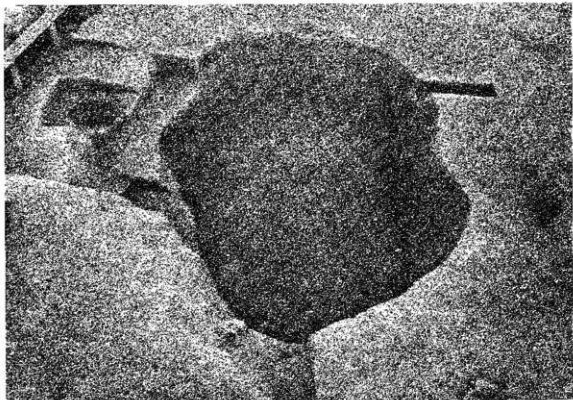
2 AK6遺物出土状況(西側より)



1 AK6遺物出土状況(部分No1)



2 AK6遺物出土状況(部分No2)



1 AK6完掘状況（西側より）



2 AK7遺物出土状況と埋積状況（東側より）



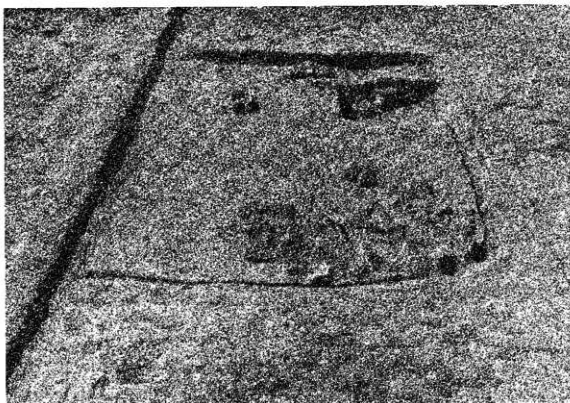
1 AK4遺物出土状況（西側より）



2 AX1遺物出土状況（北側より）



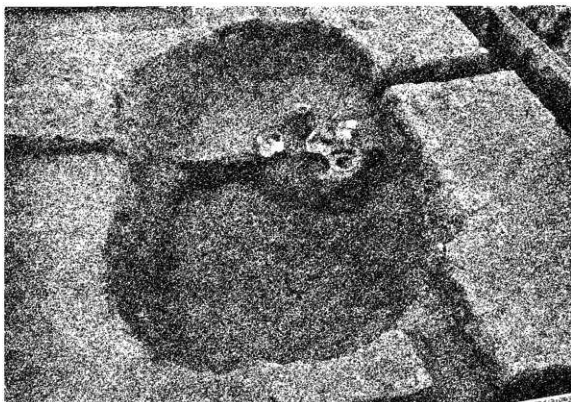
1 AT1遺物出土状況（西側より）



2 AT2調査状況（東側より）



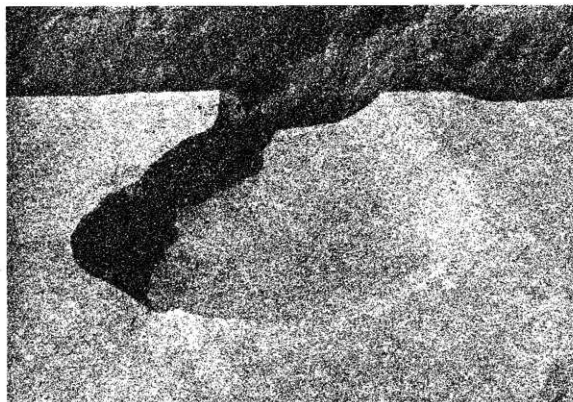
1 A29地点完掘状況（東側より）



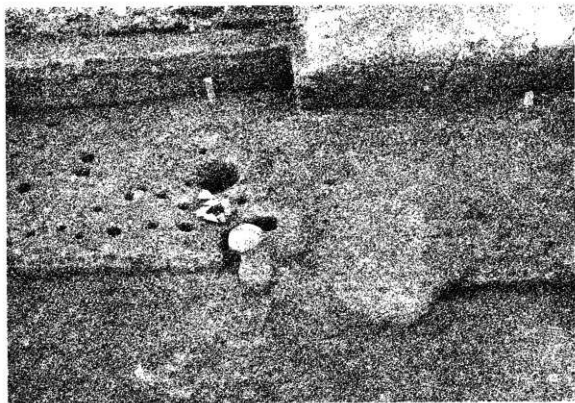
2 AK8調査状況（北側より）



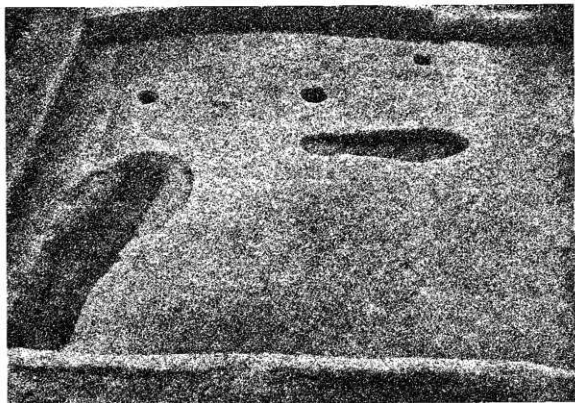
1 AK8遺物出土状況（北側より）



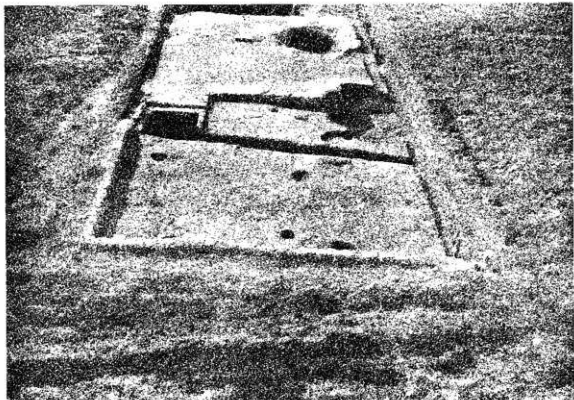
2 AK9完掘状況（東側より）



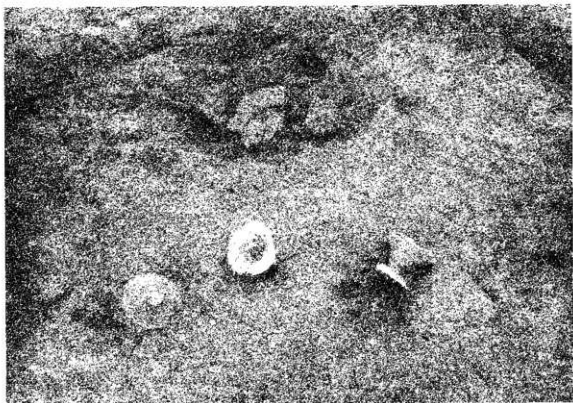
1 AT4調査状況(南側より)



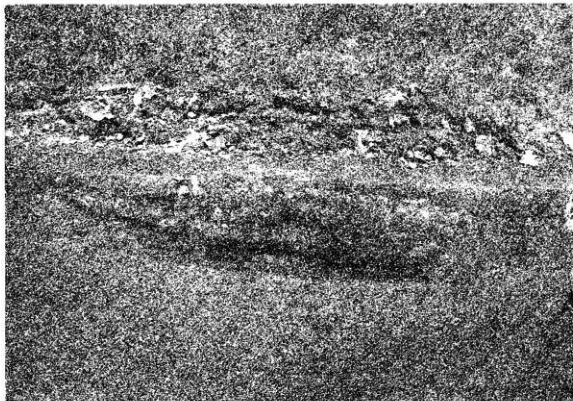
2 AT5・6完掘状況



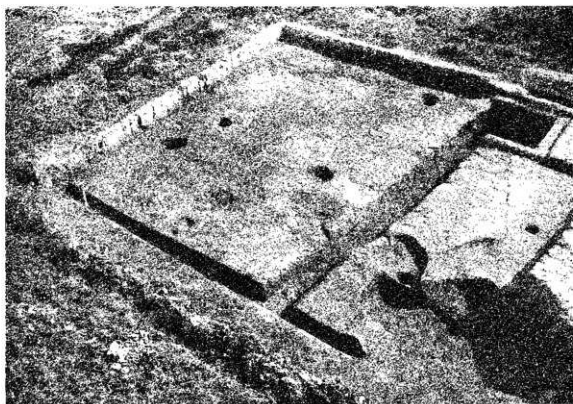
1 A30地点完掘状況（東側より）



2 AK10遺物出土状況（西側より）



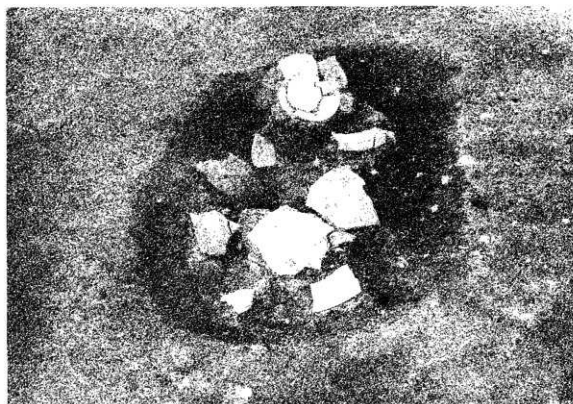
1 AK11埋納状況



2 AT7完掘状況(北側より)



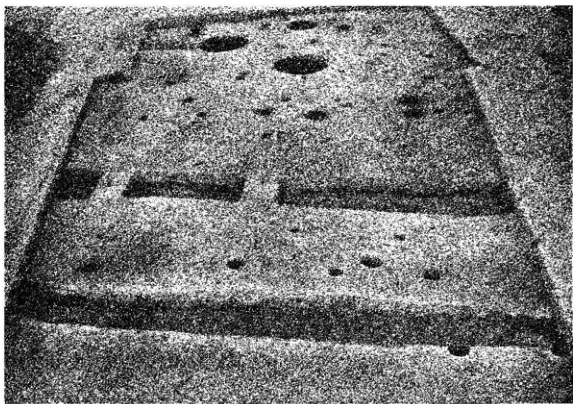
1 D13地点調査前全景（南側より）



2 B1K1遺物出土状況（南側より）



1 E8地点調査前全景（東側より）



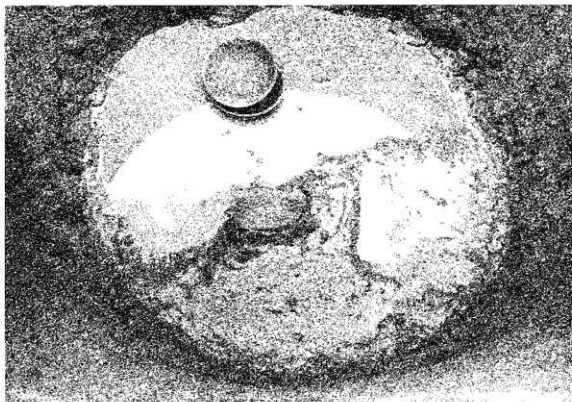
2 E8地点完掘状況（南側より）



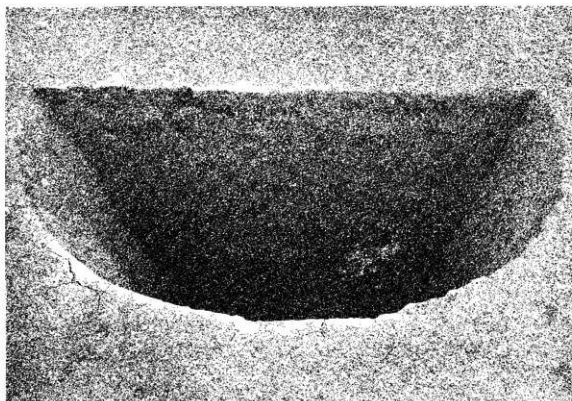
1 E 8 地点井戸状遺溝 (南側より)



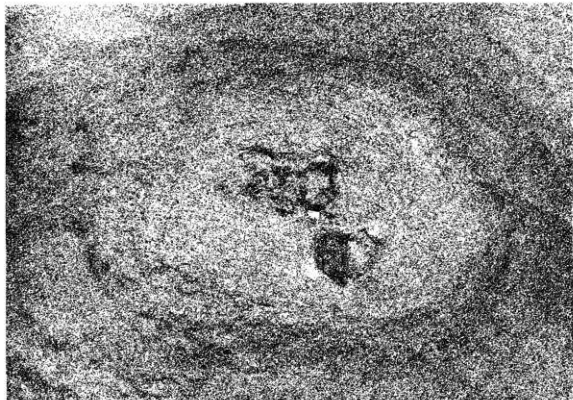
2 Bs E 1 調査状況 (西側より)



1 BsE1 底面遺物出土状況 (西側より)



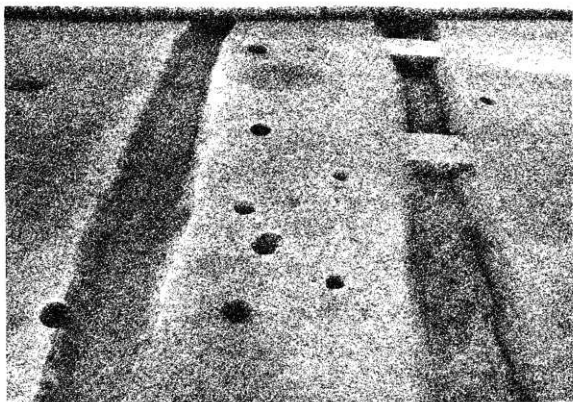
2 BsE2 壙積状況



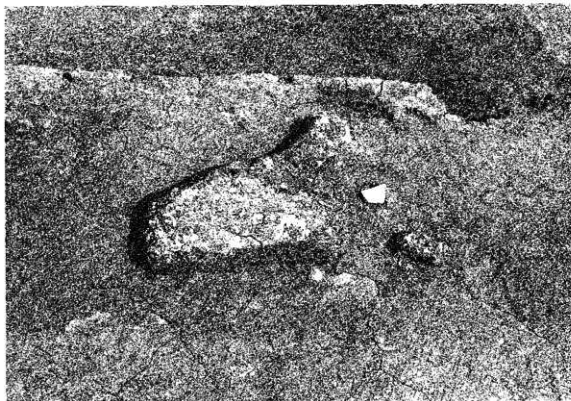
1 BsE 2底面遺物出土状況（北側より）



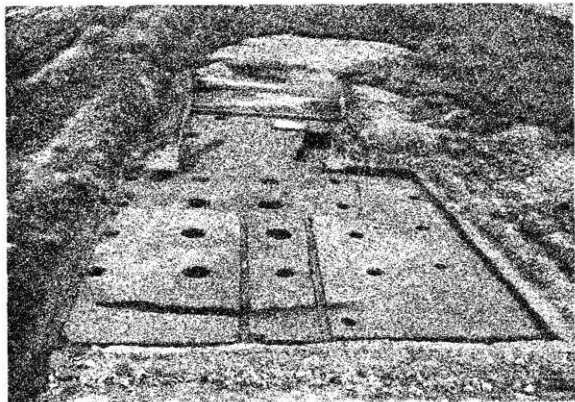
2 BsE 3底面遺物出土状況（西側より）



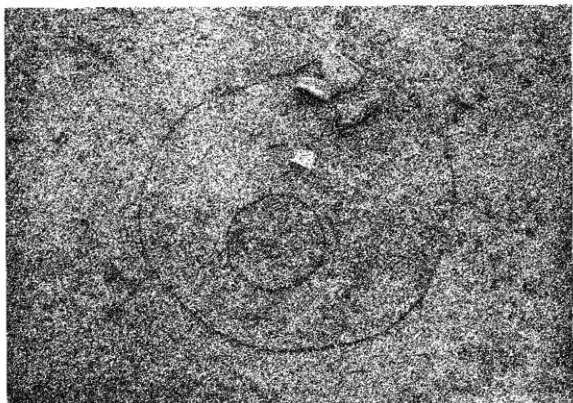
1 BsD 1 (右), D 2 (左) 完掘状況 (東側より)



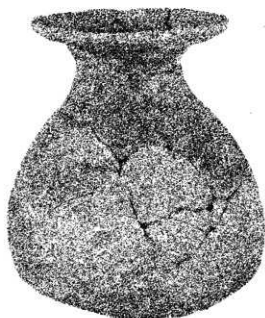
2 E 8 地点北西端の小貝塚



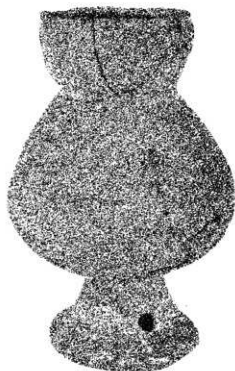
1 F11地点完掘状況（南側より）



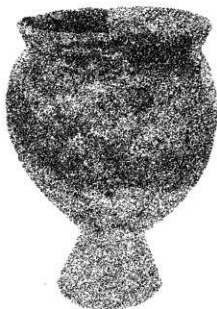
2 P5発見状況



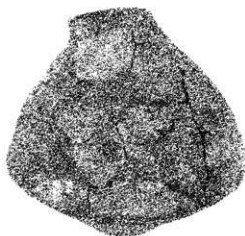
24-13



24-8



24-15



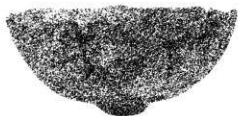
24-10



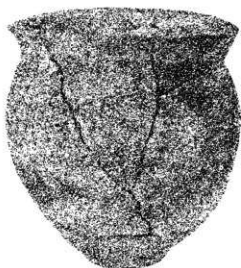
24-11



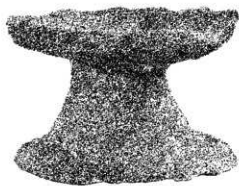
24-14



26-2



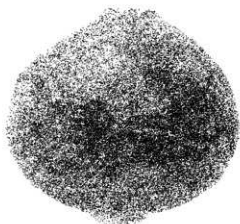
24-5



27-9



26-40



25-14



25-5



25-23



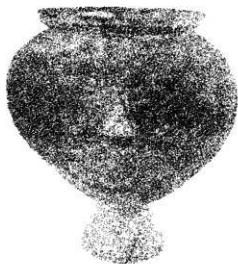
25-7



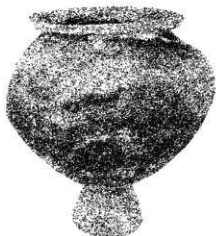
25-1



25-3



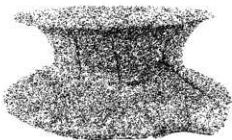
26-10



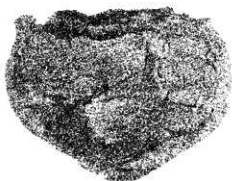
26-11



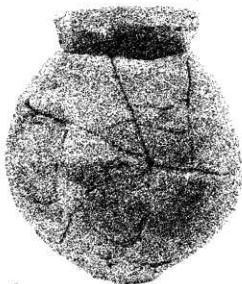
26-4



26-19



26-12



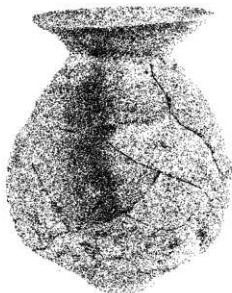
26-20



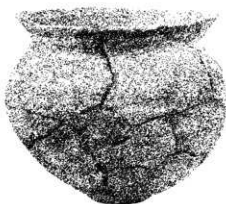
23-21



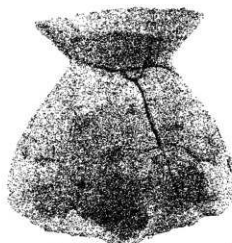
25-6



28-17



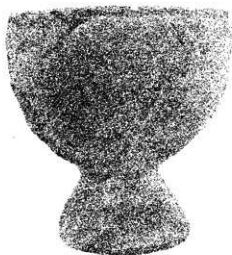
29-13



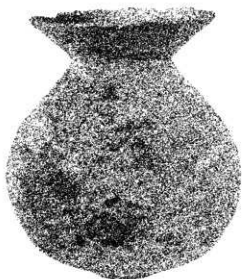
28-11



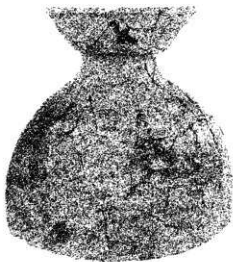
23-22



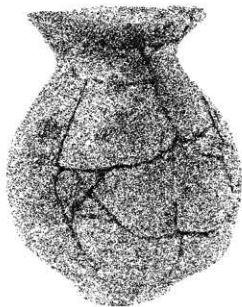
29-37



28-15



30-2



29-1



29-12



29-11

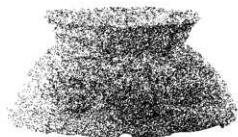
AT1, AD5, AK4, AX2, AK8出土



31-9



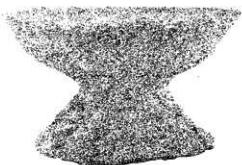
30-1



30-3



30-6



29-14



31-10



29-16

AK8, AK9, AK10, AT3等出土



38-33



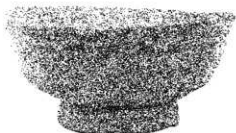
33-0



38-36



38-30



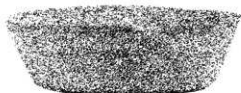
38-23



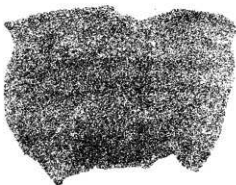
38-31



38-22



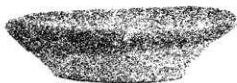
38-34



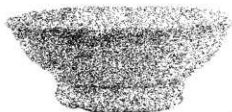
38-25



38-35



38-37



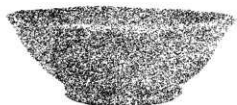
38-24



38-1



38-29



38-2



38-28



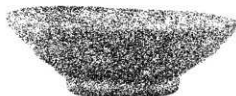
38-3



38-27



38-4



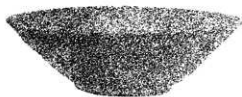
38-26



38-8



38-38



38-5



38-6



38-17

BsE 3, BsB 1等出土

1984年3月31日発行

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書（1982・1983年度分）
青木、馬場第1・第2遺跡

編 集 行 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

印 刷 京都市下京区油小路通り仏光寺上ル
有限会社 真 陽 社